



壬辰記

36

特別
イ4
1919
231



門 14
號 1919
卷 36

特

~~門 15
號 1920
卷 36~~

昭和十六年十月三日
市島謙吉
贈

雅俗相半録編述

に就て

鼠巢庵

春城市島君は多方面の趣味に富む。嘗ては政治の舞臺に登壇して熱帯を振ひ本來の特長も専ら此にあるが如き觀望呈したが、其實決して世間一様の政治屋を以て始終すべき性格ではない、其の天分に依つて察すれば、君は到底趣味の人である、一に局して他を顧みざるが如きは君の堪へざる處、博く涉つて千種万種の趣味を捉へずには生きて居られない人である、然れば君は緊要事務に當つて方に一の粗漏なきを期すると共に、如何なる場合に於ても其の事に關し物に關して趣味の眼を注ぐ事を忘れ得ない。

此の如き性格なるが故に君は少時より隨筆類の文學書を最も愛讀した、隨筆は趣味の眼を以て見たる文學である、最も多方面なものである。君の嗜好に投ずるも無理はない、然れど熱烈な愛讀者は遂に讀者として終り得べきものがない、君はやがて筆頭一步を進めて自ら隨筆作者となつた、即ち君の日記と稱するものは、君の隨筆である、殊

に最近十數年間の日記は毎日に量を増して居る。

私は君の親知を得て已に十年、其間數ば訪問の折ふし、君の趣味談を聞き又其の日記の一部を見るに及んで、其の該博透徹滾々として盡きざる感興に醉はされた、早稻田に人物は決して少なくない併し君の如き多方面の趣味家は無い君は早稻田第一の鑑賞家であらゆる意匠は君から出て居るのである、君は圖書に通じ書畫骨董に明るく趣味界の事に就ては到らぬ事はないと謂はれて居る併し個様な人は兎もすると活世界と懸け隔たり隱居ジミるものであるが君に於ては全く反對で君は最も際どい實行家として經歷を作つて居る、其初めは早稻田専門學校の經營家次ぎには政治家新聞記者やがては早稻田大學の爲め前後二百萬の金を募つた經歷を有つて居る故に其の頭腦は眞剣な實生活の洗練を受けて眼光紙背に徹する鋭利な觀察を以て居る、彼の閉居主義の文士が、机上の空想から生み出した狹隘不徹底な作物とは選を異にし全然生きて動くの觀察である。世に閑人閑裡の隨筆は多いが、忙人忙裏の隨筆は殆んど稀れである、同時に實行家の趣

味談も少ないものである。而して市嶋君の記録と談話とは其の經歷した事實のバノラマではなくして其の事實を機縁として自己の趣味識に鎔化作成しかつ天地である、單に其の豊富な多方面の經歷だけでも其の人物と物とを知る事の多種多様を以てして當然得易からざるの珍であるに加へて、其の鋭利なる趣味識を以て創造した別天地の當代に比類なきものである事は喋々を要しない。加るに君には莫逆の友として坪内逍遙氏の如きあるの外有ゆる方面に藝術的親朋が少くない隨つて互に日々件來して語を交ゆる機會が多い之が市嶋君の趣味識を増養し、透徹の活眼を與へるに與つて力がある、此に於て市嶋君の趣味識は單なる道樂に非ずして一代のオソリチーたるに値するものとなる君の趣味は好む處に阿つて他を忘るゝ如き墮落した骨董屋趣味ではない、一切の事物に對し之を自然の立場から考へて其の如何なる點に價値を附すべきかを公平に見究める。かくして趣味識は遂に好箇の處世哲學となる。私は今度君の日記と談話とに依つて雅俗相半録を編述するに當り此點を特に大方讀者に推薦する。



雅俗
相半録

（一）

春城學人談
鼠巢庵編

◆當北越新聞には、私の日載中から拾ひ出した談話が、嘗て一年以上に亘つて連載された事がある、其後已に四五年を経過した、此間にも私は習慣として殆んど毎日の様に日載を録してある、今再び北越新聞の需要に應じて其中から興味ありそうに思はれる話の掲載する事となつた、但し此の日載は、私の備忘録にして兼て隨筆である。始より之を世に示さんの目的で書いたのではないから、之を大方讀者の前に提供するに當つて話題の選擇甚だ困難を覚える、と言つて、此の日載を種々、話の多寡にせん事も、殘暑酷烈の折柄甚だ苦痛である、彼れ是れと雖かしく考へると、遂に之を發表するの機なきに終る事ともなる、依て大さつばな處で兎に角試みる事とした、別に

類を分けるでもなく、又順序を立てるでもなく、思ひ出づる儘に各方面の話題を拾ひ出して之を讀者に提供する、中に、雅談もあり、俗談もある、雅俗錯綜して現はれる。
◆以下評述する中には考証を要する話題も多々あらんも、新聞紙に考証沙汰は禁物である。依て考証は出来るだけ省略する、唯だ私が近頃見聞したる物に就いて直覺した所を直載に語るものである、粗笨ながらも、其中一道の生氣ありとすれば私の望みは足ら、敢て一家の説を提けて大方の識者に誨ふるなどの意は毛頭ないのである。標題を「雅俗相半録」と名くるが如きも、右の意から出た事である。一貫の体あるに非ず雅俗相半ばして讀者に見ゆるの意を解してほしい。

178

二十南... 今日... 少くも... 三十九... 依て大さつばな處で兎に角試みる事とした、別に

我れに... 依て大さつばな處で兎に角試みる事とした、別に



初て前回に述べた光悦と光琳とは同一

●美は女の
まことと驚き
人、大... 依て大さつばな處で兎に角試みる事とした、別に

Table listing names and titles, likely a list of contributors or a table of contents.

博士	岸野	昇平
博士	水口	保治
博士	高橋	孝三
博士	若菜	三造
博士	下平	軍平
博士	久保	一三
博士	小林	保治
博士	吉原	三孝
博士	水口	保治
博士	岸野	昇平
博士	水口	保治
博士	高橋	孝三
博士	若菜	三造
博士	下平	軍平
博士	久保	一三
博士	小林	保治
博士	吉原	三孝
博士	水口	保治
博士	岸野	昇平

じ様なタイプの人と推測され、共に光
 の字が付いて居るので、従来、誰れし
 も其の親族の關係あるらしい事を漠然
 と考へて来た。之は唯だ何の據り處も
 ない所謂憶測と云ふものであつた。處
 が近來研究の結果、其の畫風は兩人共
 に同一系統に屬するのみならず、親族
 關係が有たと云ふ事も確かになつた。
 光琳は模様圖案家として世界にも比
 類なき天才であつた、世人は誰しも光
 琳模様と云ふ事を知つて居る、併し光
 琳の經歷事蹟は漠然として世に知られ
 ず、其の裝飾的な畫風のみ今日噴々人
 口に上る。光琳の意匠の範圍を脱して
 は模様を創作す餘地がないと云はる
 る。彼が天才と力量とは曠古の偉觀で
 ある。

私の知る處では、光琳の親は二條家
 の御用商人で始終御用聞きに出入りし
 て居た、此事は、二條家の執事の記録
 によつて判然とした。尙ほ彼は他にも當
 時京都の紳士の家に出入りした御用商
 人で、可なり富有なものであつたらしい。
 處が此人が死んで遺産が光琳兄弟の
 間に兩分された、光琳は初め三人兄弟
 であつたが長兄は早く没したので、彼
 は父の遺産をば、弟の乾山と兩分した。
 其の金額はどれ程有つたか能くわから
 ないが、傳説には所謂千兩分限の家だ
 と云ふ、假りに少なく見積つて字義通
 り千兩の遺産があつたとすれば、光琳
 乾山兄弟は、五百兩づつ得た事になる。
 併し千兩分限と云ふのは、千を基準に
 何千兩と云ふ財産があつた意味で、二
 兄弟の分けた金も何千兩づつと有つた
 ものらしい、當時の千兩は今日の一万
 圓にも相當する價があつたので、彼等
 は、之を資本に、各々其の好む所に赴
 いて、兄の光琳は畫に行き、弟の乾山
 は陶器に趨つた。共に之れ富貴の若巨
 那藝であつた、それだけ、何等他の掣
 肘を受くる事もなく、生活難の苦勞も
 なく自由奔放に其の天才を伸ばし得た
 のである。



雅俗
 相半錄
 (九)

△光琳研究(2)

春城學人談
 鼠巢庵編
 光琳は性來繪畫の趣味を多分に有つ
 て居た、之に加ふるに能樂趣味を以て
 した。其の畫は寫實を超越して、模倣
 風の理想化されたものとなつたのも、
 此の能樂趣味から來た影響であらう。
 而して彼は其の千兩の財産を投じて繪
 の具代にしたのである。弟の乾山は陶
 器即ち窯業に興味を以て居たから、千
 兩を投じて窯にかけた、かくて兄弟共
 に金持ちの若旦那藝を始め、金にあか
 して道樂研究を仕遂げたのである。勿
 論光琳は充分の才が豊富であつた事は
 言ふ迄もないが、彼をして其の才を大
 成せしめたのは、其の富有にして生活
 難の累がない事、随つて好き勝手に存
 分の研究を試み得られた事である。此
 に於て其作品は群を抜き勝を越え、

百道樂
 志の陳人

光琳は一見識を持つた傑物で、決して
 因襲的な世間並みな規矩に束縛せら
 れて安んずる人間ではなかつた、手近
 い證據には、彼は當時流行の茶道にか
 けても、一家の特色を發揮して他を脱
 若たらしめた。即ち當時の流義として
 茶室の庭には草花を植ゑなかつた。座
 敷に草を生けるから庭にも草花では重
 複するとして之を忌むのである。處が光
 琳はそんな因襲には一向頓首しない、
 自分は茶趣味を樂むので、己れの好む
 所に従ふ處が生命であると言ひ、逆
 庭一杯に草花を植ゑて樂んだ。萬事が
 斯んな行き方であるから、畫道にかけ
 ても、傳統も流派も彼が眼中にない、
 高價な繪の具や金箔をことごとくに打
 けては只管に自分の趣味嗜好に適ふ

廣井紅秋君、新年附録に百道樂を載せしめて、陳人に談話を誦めたる、陳人道樂多しと雖も、百の道樂を有するにあらず、然れども唯單に百の道樂を擧ぐる、強難きにあらす、勿卒諸して思ひ出るに、漫りに談じて筆録せしめたる、新年附録の二頁を充すに至る、思ふに世の道樂と云ふもの、豈百のみならず、斯る者を選ぶに己れの好む所に偏するは勢ひの已む能はざる所、陳人の擧げたる百道樂中、或は擧ぐべきを逸し擧ぐ可らざるを擧げたるものあらんか、今は選擇取捨の暇あるなし、且つ紙面限りあり、各項多く注記を許さず、讀者杜撰を咎むる無くんば幸甚。

書畫 此の道樂は特に手廣く行はれて居る、これは目前の事實であるから、在するに及ばぬ、但し此の範圍に色々部分的の道樂が澤山ある、それは別項に一類として擧ぐることにする。

骨董 此道樂も前項と同様に如何にも廣いものである、文具や茶器や其の他の類を擧ぐれば幾百あるか、知れぬ、これも部分的にそれ、道樂があるから重なる者は別々に擧ぐる、ここに所謂骨董と云ふは別に一類として擧げたる者の他一切を包羅するのである。

書物 此の道樂は手廣く行はれて居る、書物とし云へば、何んでも構はず集めて其識書の多きを快とするものもあるが、珍書道樂と云ふが書物の各部類に涉つてある、書物には西洋も支那も日本もあるが、日本の珍書と云ふは版本なれば慶長以前のもの、珍とす、尤も慶長以前には軟種の書物は極めて少く、輸入木花柳界の本のごときは元禄以前を珍とする、支那のは宋元以前の者を貴重本として居る、西洋の書物は千五百年代からおほむね珍書とする、古版を珍とするのみでなく、古寫本

も時代により珍とするは勿論である、時代古からざるも、名家の自筆をも珍とする、各部類共なかく、数の多いものであるから、部類々に依り特別に道樂がある、大名で此道樂の尤も大なるは加賀の松雲侯、一市人で鑑識の卓越であつた者は狩谷菴齋である、圖書道樂の内には、絶版書ばかり集めるもあり、蒙求と名のついたものはかり幾十部を集めるもの、消息往來の如き往來ものはかり集める者、地圖ばかり集める者等、皆此部類の道樂に屬する。

經卷 古經道樂と云ふが學者烟に昔から澤山ある、古經には版經と寫經の二種あつて、支那印度日本其を包羅すればなかく、廣いが、其内珍とするのは時代の古いのである、版なれば宋代のもの、寫經は支那なれば六朝唐、日本なれば天平若くはそれ以上のものを尤も貴重、聖武帝光明皇后の願經などは今は格別珍しくも無いが、昔は一行若くは、數行切斷して珍蔵したもののである、河樂翁侯も此の道樂があつて、大般若の珍らしい零本ばかり六百卷集められたことがある、今は帝國の御物となつて居る、田中光顯伯も此道樂

に熱中された、数は多くないが、頗る珍しいものが十數ある、僧侶では芝三線山の徹定と云ふ人が此の趣味を有し、天下の名經を多年探討し、且自分も澤山に集め、號を古經堂と云ふた。

硯 文房器を多く集める道樂の内、尤も多くあるのは硯である、勿論支那のものも珍とする、濠洲とか武州とか云ふは皆支那石で日本には硯となる名石が少く、石の質の佳なるを第一に擇ぶが、形態や刻字や時代の品段が定まる、昔も高島其他多少佳石がある、昔も高島其日本各所の石で作つた多くの硯を集めたので名が高い、今藏硯家で知られて居るは三井家に一人、日下部鳴鶴翁などである。

筆 文房中の大切なもので、實用上から多く集める人があつたが、趣味上から集める者は、軸の意匠の異つた者を取る、自分も曾て異つた筆を百餘集めたことがある、實に意匠は百端とも云へる、軸の材料を云へば付は勿論地朱、硯、陶、鐵、木等さまざまあつて彫刻のあるもの時繪の施しある者、天平筆有職筆皆を

れ、異つて居る、米庵は多く筆を集めた人で、筆譜が版になつて居る、**水滴** も文房の一ツで、文人風の者は古銅や陶器いろ／＼ある、寺子屋時代に仕用した水入も様々あつて形態もなかく、異つて居る、京都の下加茂に多くの寺小屋式水入を多量集めた人があつて、自分も曾て見たことがあるが、其數五百に及んで居つて、實にさまざまのものがあるのに驚いた、皆陶器である。

印 の趣味家は學者風の人に多くあつて、純造と云ふ人などは此の蒐集家として支那にも餘り多く無い位だ、印に尤も貴ぶものは刻の佳なるとである、刻の佳なる者と云ふと漢印の趣味のあることは刻字に味のあるばかりでなく、材には石あり木あり竹あり磁あり水晶あり銅あり金あり、石の内にも鶏血、凍石、田黄、魚腦などさまざまあつて、凍石の内には純金よりも貴いものがある、又鈕の刻も様々あつて一層趣味が加はる、印ほど形が小さく趣味の多方面の者は少い、文人ものでは無いが、絲

印と云ふ者がある、昔支那から絲を輸入した頃刻符の意味で此の印が荷の中に這いつて来たると云はれて居る、銅印で刻字は多く讀めぬが、鈕が甚だ雅である、日本趣味に投ぜん爲めエビス大黒などの鈕を作つたものもある、豊大郎の用印も此絲印を間に合はせたまものである、數多く集めてみるとなかく面白味のある者だ、昔館柳鶴は百個集めたと聞いて居る、大坂の平瀬といふ豪家に百個蔵して居る、自分も五十所有して居る。

法帖 は書を學ぶの軌範であるから其の佳なる者を選ぶに古來苦心し王羲之の蘭亭や聖教序ばかり百帖も集めたものが幾人かある位だ、古い程字が崩れて居らぬ譯だらう、宋拓を欲するも容易にえられぬ、定武の蘭亭が第一と謂はれて居るが日本支那でもこれが十指を屈する程しかない、隨つて其價は實に貴い、支那の帝王でも羲之の墨帖には憂き身をやつして搜した位のものである、羲之ばかりでなく、古賢の書を法帖に彫且つ無したものも幾十幾百通りあつて、多くは刻した人の名などで呼んで居る、大養木堂や中村不折など

が此道に知られて居る、尤も多く集めて居る數奇者は各所に澤山ある、**拓本** も法帖に似た様なものである、これは帖の形をなさぬ所から區別してこゝに一類として擧げる、例へば日本でいへば多賀城の碑や多田の碑などを無したものは奈良朝佛像の背面若くは蓮座などに刻してある字を無したもの、朝鮮でいへば日本の三韓征伐の事を勒してある勾高麗の碑を無したもの、其他支那で數多き六朝其他の金石の拓本で古い字の研究資料となるべき者一切を網羅する、今此道の數奇者は澤山あり、支那より珍しい者が續々來るが矢張古拓を珍とする。

古瓦 を多く集めるのも拓本を集めると同脈の趣味に屬する、支那にも咸陽宮未央宮などの瓦が今でも存して居る、昔入唐した僧は必ず土産に持ち歸つたものである、多分土産用に偽造したものも交つて居るであらう、此の瓦には刻字のあるもの繪などを彫つたものもあつて風韻のあるものだ、或は之を材料として硯を作る人もある、日本でも一時古瓦を無間に弄びいろ／＼製作が出来た

鏡、鎌倉の武將屋敷の瓦などは面白過ぎて眞物と取られぬ、金石類を集める道樂がいろいろある中に鏡を愛玩する道樂がなかく少くない、鏡には支那鏡もあり倭鏡もあるが、多く珍とするは支那鏡で、其古いのは漢、六朝、唐あたりのものだ、倭鏡にも様々があるが自分の知人中で多く集めた者は今は故人となつた木村家市といふ人で、和漢五百種も蒐集した、今は大坂の久原家の有に歸して居る。

銅器 漢や六朝の古代を味はんとするには金石類の外存して居らぬ、そこで古銅器道樂といふが起る、此頃の銅器は多く祭器である、それを花瓶や其他様々の事に見立てて、適宜して居る、模様や彫字が奇古で、吹き出した線青や赤に一種の風韻のあるのを喜ぶ、日本の古銅と云へば經筒などである、他に佛具の類もあるが、別項に掲ぐる、日本で古銅器を多く集めて居るのは大坂の住友家である。

佛像 趣味の向上は結局上代に溯る、上代に溯ると佛像の外に物が多く存して居らぬ、佛像道樂ほど高尙のものは無いとも云へるが、

多くの金を要する所から俗な人に却て此の趣味がある、或は推古佛或は六朝佛、形が大きい且つ名作である幾つもの、或は木地のもの、銅のもの、純金のもの、塗金のもの、乾漆のもの、いろ／＼あつて鎌倉代迄下ると愈々澤山ある、大なるものは多く獲がたく室内の裝飾にも成り難いから、頃の者を多く蒐集する、岡田法學博士は支那から六朝佛を多く購ひ得てかへり、其内一基を以て或人の別荘と交換した、

佛器 佛像趣味と關聯のある道樂は佛具を集めることである、佛像を集めんか自然これに配する者が要る、香爐とか獨結とか卓、瑤珞、蓮座などの類より袈裟等などに至るまで巨額の金を投じて集める者がある、何れ天平頃でもいふものになるとコンナ者でも幾千圓の價のある者が多い、

磁器 これも極めて金のかかる道樂で、貧乏人の企て及ばぬものである、低には白紅青等いろいろあつて矢張時代の古きを貴ぶ、漢磁は支那でも極めて少く愛蔵家の尤も珍とする所である、或は香爐或は如意、琳の筆などもあるから、一本幾百圓の價のあるものもある、大坂で日本のあらゆる製産地の團扇を集め千近く所持して居る人がある、いつか京都の大丸で借り受けて陳列した時に一見した、松浦武四郎は名家を訪問する毎に必ず腰に一本の濞團扇を挿して出かけ、それに書畫を請ふた、今それが屏風に張られて保護されてある、なか／＼面白い者だ、

短冊 は大體寸尺が極つて居る様なもの、實は時代により幾らか違つて居る、紙も勿論いろ／＼異つて居り或はカンナ屑ともいふべき木片葛布などで作つたものもある、俳諧用のものは和歌用と自から違つて居る、古今各種の短冊の蒐集家も稀にはあるが、重に書のあるのを集める、古今の名人を集めて誇らんとするには、千枚位は集めなければならぬ、蒐集家の中には歌よみの和歌は有り觸れて居るからといふて、非歌人の歌のみを集める人、或は詩のみを集める好事家も居る、

札 は紙幣のことである、但紙幣といへば多く政府發行のものを云ふ、商店などで私に發行する手形のとさきのもの、封建時代に各藩で發行した札も紙幣と同様の働きをしたものであるが、此れ等を假りに札と名づけ、此頃にもすべてそれ等を洩くいふのである、さて古來札と名のつくものを数へて見ると實に数の多くあるものだ、博物館にも数千種の札が集めてあるが、自分の知人でそれより遙かに多く集めて居る人がある、それは大坂附近の前田屋といふもので五千幾百種有して居る、中には頗る珍しいものがある、今時紙屑に成つて仕舞つて居る古き札を集めることは容易でないが、此道樂を遣て居る人は意外に多く有る様に思はる、

貨幣 硬貨を集める道樂も前と同脈であるが、これは多く金銀であるから廉い道樂でない、昔から此道樂をやる人は多く金持である、日本の小判の各種を始め世界各国のあらゆる貨幣を蒐集するものは幾萬といふ費用がかかる、自分の知つて居る

所では大坂の造幣局並に帝室博物館が多く集めて居る、

古銭 貨幣の内専ら内外の古銭を集めるのを道樂とするものが今でも澤山にあるが、其数は夥しい者で、珍しいものとなつて一個二百圓の價のあるものもある、成島柳北や守田寶丹其他土佐の某とかいふ人などが著名の蒐集家である、

瓢 の蒐集家は酒呑のみでない、酒を飲まぬ人に愛蔵家がいくらもあるが、これも支那ものを珍とする、大小形状さまざまあつて、小なる者は豆ほどのものもある、色澤は多く酒を容れねば出て来ぬ、艶を出すにはなか／＼資本がかかること、或は名家の手澤を珍とする、或は雁首が曲がつて居る様な者を珍とする、日本でも熊本が産地として知られて居る、東京で時々愛蔵家の持寄會がある、一瓢千金の價のあるなどは珍しくも無い位だ、

杯 の意匠も百端である、陶器あり、金銀あり、漆器あり、その形貌模擬なども如何にも多様である、概して形の小さな爲めに蒐集して陶器の標本とする人が少く無い、大抵の精巧のものになると幾百圓幾千圓のものもある、これを数多く集めて居る人が古來多い、維新以來多く輸出された、

緒 印籠や袋物に附帯してなにか／＼好事のものが多くあつた爲めに、之を多く集める、珊瑚、瑪瑙、水晶、七寶、とんぼう、其他貴金屬、彫刻物等意匠の凝つたものがいくらかもある、

根付 これも緒と同様であるが名工は此の小品に非常の苦心をしたものだ、随つておもしろいものが實に澤山ある、これも腰下のものが乗つたから餘り實用にならぬが趣味家の蒐集を力めて居ることは今も尚ほ舊のごとくである、

紙入 も昔は意匠を凝らしたものである、男子用のもの女持のハコ、セコ或は大或は小、大なる者は二つ折の小菊の紙が這入る、裂などにいろの好みがあり、金具にも上覆にもそれ／＼の好みがあつて澤山のものになると今でも一寸程の裂地や革で幾十圓もする程のものがある、昔は多く之を作り若くは多く所持するを興があつたのだが、今は西洋風の紙入に移りかはり之を多く蒐集して居る人がある、

名人は必ず杯を造つて居るから、作者の標本にもなる、木米の作などなる一つの杯でも二十圓の價がある、

扇 も種類が非常に多い、男持も、女持もあるのみならず、有職の扇には中啓といふがある、骨の数の三四木のもあり幾十本の多きものもある、紙もいろ／＼ある、各種の扇を集める者もあるが、多くは、書畫の書かれてあるために集める、骨を外した者を澤山集めて扇面帳などを製する者もある、併し骨付きの儘なるを特に珍とする、支那の扇は日本のものよりは製作が精で、日本のごとく矢艦に乗つてぬ習慣がある所から、名人が力を極めて書畫を作つて居る、故に貴むべき者が多くある、随つて支那扇面ばかり集める好事家も居る、

團扇 は扇と似た趣味であるが、較々俗な趣味である、これも製産地により、いくらか異なつて居る、大小さまざまあり、大なる者に至つては一人で振り廻はされぬ様なものもある、錦繪風の繪のある者文人風の畫のあるもの、版の繪、肉筆の繪、さまざま異つて居る、肉筆ものには光

居る人がある、

浮世繪 日本で國民的藝術といふべきは浮世繪である、日本の社會は多く此の繪畫で教育されたものだが昔は江戸土産といへば此の繪で、如何なる家でも自然に藏して居つたものとだが、外國人が珍重してから日本でも此の繪は蒐集家が盛んに起つて来た、此の繪は版繪であるが、いろ／＼種類がある、三枚五枚十枚つづきのものもあり、幅に出来る様な繪もある、風俗繪もあれば風景繪もある、美人繪もあれば芝居の繪もある、價の高いのになると三枚つづきで五百圓もするものがある、

番付 芝居相撲の番付は勿論番付風に出来たものがある、数多くある、藝妓や茶屋女などの番付もあつた、多くは繪がある、これも古いのが珍とされる、別して時代順に多くあつまつて居るのが喜ばれる、昔も今も此脈の蒐集家が少くない、

鈴 も古銅器の一種として昔より集めるを趣味とした人が多くある、古く騾鈴と云ふものがあつて、其形にさまざまのがある、甚だ雅味のある者だ、又祠に捧ぐる鈴、馬につけるもの、小供の腰につけるもの或は

人を呼用のもの、大小形状さまざまあつて、此の蒐集家は幾百となく持つて居る、木居宜長も此の趣味家であつたが、書齋に多くの鈴を吊るして居つて、鈴の屋と自ら名乗つたものだ。

墨斗

これも昔は盛んに行はれたからいる、ある、武家には武家相應商家には商家相應のものがある、長天正頃の戦國時代に首級を録した軍用墨斗は、脇差程の長い柄があつて大筆が這入つて居つた徳川時代の太平の天地にはコンなものに凝つた意匠を凝らし、互に巧を競つたことは、印籠や烟具と同様である、随つて集めてみるとなかくいろいろ工風のあるものが出て、来る處から今現に之をしきりに集めて居る者があつた。

烟具

煙草入や煙管や煙筒の道楽は眼多し人の知つて居る通りであるから、ここに多く注する必要がある、煙草と云ふものは始めて渡つた頃出来た粗末の煙管、花魁の用ひた様の延べぎせる、男達の用ひた大煙管や大煙草入などは是非此の蒐集中に無かる可からざる者だ、三十年前全國の竹幾百種

を集めて書齋の壁に装置した博物館もあつた、徳川頼倫侯は現在竹の蒐集家で茶客ばかりでも百種近く集めて居らる、竹器は廣く行はれて居るもの、随つて此方面の採集家は甚だ多い、自然石が賣物となつて居るの

石

世界日本ばかりだと云ふ(建築用の石材は別として)支那と日本ほど自然石に興味をもつて居る國に無い、庭石を多く集める人も少くないが、机上の置ものとして、或は花に配するなどの爲めに眞石を多く集める人もある、或は奇形の石のみを集める人、或は支那の太湖石靈璧などを集める人もある、随つて此れ等の石の價はますます高くなつて来る、刀剣と附屬品の趣味は何人も知つて居る所で、戦國時代の遺風が今でも幾何か存し、尙ほ盛んに弄ばれて居る、土佐では今村長賢と云ふ近來珍しい刀剣家を出し、同土佐人で田中光顯伯も斯道にかけてはなか、大養木堂や其他知人中にも幾人も此の道楽のものがある、碁盤の道楽と云ふが碁打の範

刀剣

園にある、二ツか三ツもあれば澤山でありそうなのだが、木地の佳な

るものゝ常に探し歩いて、在さへすれば必らず幾面でも購ふ人がある、大養木堂なども其一人で、大坂あたりで會すると必ず碁盤を宿屋へ持込んで来る商人がある、博物 學術的に禽蟲、魚介、礦石

博物

等種々の者を蒐集するがそれは道楽ではない、昔同様などをした其内に本草家と云ふものも集めたものは、今の學術界の人々の標本蒐集と同意味であるが、本草家の感化を受けて此の採集家がなかく多くあつた、それは多く奇を好むと云ふ上から来て居つたから、抵ね奇と云はるゝ様

和蘭陀物

昔ハイカラ趣味を志した連中は、外國のものを買つてオランダものと總稱して、何んで較でもオランダ物とし云へば興がつて杯やらコップやら織物やら陶器やら金銀類の作品やら繪畫やら圖書やらを愛玩した、今でも文明源流の参考と云ふ様な理窟の上からこれを集めて居る人があつた、渡邊修次郎のごときは、多くのオランダ類の圖書をあつめて居る、天正頃、スペイン國との交通關係から、いろいろの物が兎もするとあつた、此れ等も皆

此類に包含されて居る、土中より出る古い器具は人類學の參考となるもので、學術的に價値も有るのであるが、人類學などの研究も無い時分から古代趣味の嗜好より、或る識者の側にはしきりに珍重された、此の土中物と云ふのは古代の武器類即ち馬具、刀剣、矢の根の様なものより種々の土器類に至るまで、すべて古墳其他より出たるものを集める人が、金石の愛玩家同様多くあり、今も澤山ある、曲玉 これも發掘品であるが、特に一類を爲すほど採集家が多くある、曲玉の内には瑠璃と云ふ種々の佳品もある、これに附帶して同く服飾用品として作られた金銀環、管玉の如きものもあつて、みな土中から發掘されるものであるが、中に貴族の古墳より稀に發掘される曲玉一個で一萬圓の價を有するものもある、灘の嘉納家から大坂の藤田家に譲つた曲玉は現に一萬圓以上と聞えて居る、籠 は各地方に於て産し、各々其特張がある、材料は主として竹であるがアケビの蔓や其他地方特有の材料を用ひて、手工に巧拙はあれど概して雅趣がある、其用途は種々にて

發掘物

曲玉 これも發掘品であるが、特に一類を爲すほど採集家が多くある、曲玉の内には瑠璃と云ふ種々の佳品もある、これに附帶して同く服飾用品として作られた金銀環、管玉の如きものもあつて、みな土中から發掘されるものであるが、中に貴族の古墳より稀に發掘される曲玉一個で一萬圓の價を有するものもある、灘の嘉納家から大坂の藤田家に譲つた曲玉は現に一萬圓以上と聞えて居る、籠 は各地方に於て産し、各々其特張がある、材料は主として竹であるがアケビの蔓や其他地方特有の材料を用ひて、手工に巧拙はあれど概して雅趣がある、其用途は種々にて

革

は袋物に大切な材料である、古金蘭など、同く中には驚くべき價を有して居るものもある、正平革などは誰も知つて居る有名なものだ、金唐革と唱ふるものは皆な渡りものであるが、此の内には一寸四方幾十圓と云ふ珍物もある、日本では昔し婚路が革の上品を出した、これを集めるのも一つの道楽である、杖の道楽と云ふがある、徳富蘇

杖

峰などは西洋風の杖を道楽に澤山持つて居る、舶來の杖には材料の趣味のある者が甚だ多い、日本でも仙

下駄

も俗な趣味だ、通客は下駄を作るに容易ならぬ苦心をする、或は鼻緒の選擇に憂き身をやつしてこれが爲めに多くの價を拂ふことを辭さぬ、これも集めると云ふより、自ら工風するほうが道楽である、珠數の道楽は僧侶には無論あるが、多る多く文人風の煎茶家などにある、併し珠數の形式が此方面の

商標

と云ふのは今のを云ふのではなく、昔の賣品の袋や上は包などに商家の印など捺しある者を數多く集める道楽が昔からある、有名な老舗のものや得難いものを珍とする、此れ等の數奇者の何百何千と集めた帖が今でも偶に出るが、其の備はつたものはなかく趣味の有ものだ、納札 神社佛閣へ参拜の紀念に

手拭

俗な道楽であるが、或る

珠數

の道楽は僧侶には無論あるが、多る多く文人風の煎茶家などにある、併し珠數の形式が此方面の

納札

神社佛閣へ参拜の紀念に

小切

書畫道楽の内、小品ばかりを集める道楽がある、此の小切はつまり張交屏風を作る材料となるのであるが、形は小なりと雖も大幅よりも却て價の貴いものもある、得るに随つて張交屏風を張かへし居る道楽は書畫界に幾らもある、遊里物 白粉臭い道楽である

春畫

警察が八ヶ間しいから、表面知れないが、春畫を集める道楽は必ず此の方面に筆を弄して居るから、珍しいものが澤山ある、故人中上川彦次郎と云ふ人は、此道の數奇者として評判があつた、徳富蘇峰

貼込帖

帖にいろいろのもの

遊里物

白粉臭い道楽である

春畫

警察が八ヶ間しいから、表面知れないが、春畫を集める道楽は必ず此の方面に筆を弄して居るから、珍しいものが澤山ある、故人中上川彦次郎と云ふ人は、此道の數奇者として評判があつた、徳富蘇峰

矢張此の趣味
居る、
二、三、

茶箱
茶箱
茶箱

茶箱
茶箱
茶箱

茶箱
茶箱
茶箱

打方のいろ／＼の工風がある
打箱の外に草箱もあり、鎖などを
用ひるもあり、さまざまである。
帯 衣服の内でも道楽の多くあ
るは、男女共に帯である、これも通
人ヤシヤレ者の道楽である、故人守
田助彌のごときも此の道楽があつた
と見へる、帯ばかり箆笥二棒もあつ
たと云ふ、
箱 これは経箱、經置、文庫、面
箱、筆箱、鏡箱、古鏡箱、狀箱、鼓
箱、硯箱、煙草箱、香箱、用捨箱、
袈裟箱、藥箱等實に数の多いもの
で、用に応じ形式や意匠が異つて居
る所に趣味もあり、應用の利く者で
あるから調法でも、骨董を弄
ぶ人などは年中茶器の古箱や幅箱を
探して居る、相當の箱がつくと器
や書畫の品位がウンとあがる、
香 昔し香道の流行した頃、香木
の需用はなかく盛んなものであつ
た、伽羅を懐中して居らぬものは紳
士で無かつた位だ、随つて此の道楽
も盛んであつた、香木が長崎へ着す
ると、諸侯がこれを得るに競争した
程のものであつた、多くは熱帯の島
に産する名香の一としてあるスモ
ガラと云ふ者はスマトラ産であると
が今分つた、此道楽は今日廢つたが

また幾らか残つて居る、市川町一郎
などは香道樂で毎月巨額の拂ひをし
たと云はれて居る、
量器 古時の樹や、とかげや分
銅や尺を集める道楽がある、樹の
年號が刻むであつたり、おもしろい烙
印が捺してあつたりして古色蒼然た
る味を珍とするので、數寄者はこれ
を標本盆などに應用して居る、樹の
種類も意外に多くあるもので變遷の
順序で集めた者は學術上の資料とも
なる、尺も正倉院の御物を寫した
ものなどが珍とさる、これにもい
ろ／＼の種類がある、此の道楽は學
者側にも多くある様だ、
護符 御守道樂と云ふがある、
これは一ツは迷信からも來て居る、
諸國を遍歴して神社佛閣を參拜する
社中などには無論あることだが、そ
れも道樂では無い、これを道樂に集
める向は珍しい守札をあつめる、昔
甲冑を着た時代には守札を入る者に
種々の意匠があつた、彫刻物にも趣
味のある者が少なくない、例へば米
粒大の者に惠比壽や大黒大を刻むた
者などは多く人が知つて居る、
書簡箋 昔の半切にもいろ
／＼の意匠が凝らしてある、繪半切

は、僅に繪はがきの祖と云ふてよろ
しい、ヤヤ形の空押し口紅の半切や
五色の紙の切りつきなどな、かく
趣がある、封筒にも同様意匠を凝
らしたもので、多く當時有名畫家
が下繪を書いて居る、此外詩箋もあ
つて、書簡用ともなつて居る、支那
の詩箋の古いものは、極めて雅なも
のだが、今は得難い、すべて此の種
をあつめる道樂は今でもある、
有職 有職故實と云ふものは朝
廷の典例として大切であつたから、
昔しは極めて、八ヶ間しいものであ
つた、今は多く磨かれた様なものだ
が有職に關する者も今もしきりに集
める人があつた、國學者畑或は畫家な
どにある、畫家は歴史畫などを書く
参考にと集めるのだが、終に一種の
道樂となつて、盛んに熱中して居る
ものもある、寺崎廣業、下村觀山な
ども皆此の道樂を造つて居る、
江戸趣味 此の道樂は此頃
に至つてしきりに流行する、江戸時
代の風俗も今では歴史的のものとな
り、音有り振れたものでも今は、珍
しく感ぜらるる者がいくもある、例へ
ば當時の看板や、千兩箱や、行燈や
うどん箱やその他繪物や芝居の立看板

などの類實に數限りもないほどあつ
て、近頃では此の趣味の雜誌も刊行
され、陳列會もあつたらうに
軍書 軍談や軍書を讀み且つ聽
く道樂は特にこゝに擧ぐるにも及ば
ぬが、爰に昔或る範圍に行はれたの
は軍談物若くは講釋師の種本を多く
寫して興がつたとがある、如何にも
香氣な道樂であるが印刷術の進まな
かつた時代には寫本のお蔭で今尚此
類のものが幾らか保存されて居る、
併し今は此の道樂は全く廢つた、
武器 刀劍は別に一類として掲
げたが他の武器殊に古代武器の蒐集
を道樂として居るものが今も多くな
る、此の部類には鎧、兜を始めとし、
あらゆる物、弓砲の如きものでも包
含する、徳川家内此の道樂を現
に造つて居らるる人がある、
漆器 此種の道樂は多く注する
要は無い、堆朱蒔繪のごとき貴重品
を初めとし、宗哲の如き名工の作を
珍とする、
陶次瓦器 此道樂も餘りに手廣
に行はれ、誰も知つて居るから多く
注せぬ、此中に特に高麗道樂と云ふ

がある、すべて高麗陶器のみを玩
ぶ人もあり、青磁ばかり玩ぶ人も
あり、染付を主として玩ぶのもあ
り、嗜好それ／＼同じからず、圖書
の如く頗る多種多様である、
古裂 古金襴や布類の標本を集
めるものがある、幅の表装や茶器の
袋などに必要もある所から標本帖が
實際必要でもあつた、それ等實用の
意味でなく蒐集する道樂がある、金
襴類の外に有職裂と云ふがある、昔
しの禮服の裂地を位階等級に従つて
蒐集する、又僧服の裂地や裝束裂
地を集める道樂もあり、皆帖に貼つ
け其の名や時代が注されて居るのが
通例だ、
更紗 前と似た者ではあるが、
おのづから一類を爲す程道樂の多い
のは更紗である、これは無論渡り物
を珍とする、殊に古渡りを貴ぶ、古
渡り更紗は今では頗る貴重なものとな
つて居る、長崎で支那貿易が盛ん
な時には長崎の藝者は更紗の衣服を
着けて三都の藝者を壓したことがあ
る、古渡り更紗の上等となると、長
崎藝妓の垢付の衣服や帯でも非常の
價を有する、此の更紗は極めて雅趣
のあるもので、華布便覽などの書物

は昔しからあり、應舉がいろ／＼の
意匠を自寫したものも今は版になつ
て居る位で、此の方面の數寄者は決
して少なく無い、
芝居 觀劇を道樂とする者は無
論あるが劇に關する者、例へば俳優
の繪、芝居、番付、脚本、繪本、
繪看版、衣裳、カツラの類に至るま
で道樂に蒐めるものが多くある、坪
内逍遙博士の如きも脚本作者である
から、圖書の部類は何彼れとなく集
めて居らるる、西洋の劇に關する者
も此部類に屬するが、日本にはまだ
多く集めて居る人が無い様だ、
手紙 古人の遺簡を集める道樂
も廣く行はれて居る、これも際限な
くある者であるから、あらゆる方面
の書簡を集めることは困難である、
多くは好む所に偏して集めて居る、
例へば學者、畫家、俳人、歌人と云
ふ様な鹽梅にそれ／＼集める、勿論
學者と云ふても漢學者もあり、國學
者もあり、畫家と云ふても南畫家と
日本繪師と云ふ様に區別があるから
それ／＼方面を限つて集めて居るが
多い、唯だに古人の遺簡のみでない
現在名家の書簡を集める道樂が却つ
て多くある位だ、

と云ふても、矢張り
手簡が大部分を占めるが、徳川期以
前のものになると多く古文書と云は
れて居る所から類を分つが例となつ
て居る、これは多く古社寺などに傳
はり、武家や由緒ある家に傳はつて
居る者で歴史の資料として大切なも
のである、随つて史的趣味とする人
が抵ね集めて道樂とする、併し書畫
や茶湯を趣味とする人にも此の道樂
がある、慶應出身の岡本貞徳は此の
道樂を造つた、岩崎家のために重野
博士が多く集めたこともあつた、
反故 手紙も古文書も反故と云
へば反故である、反故と云ふ範圍は
なかく廣い、大抵書畫などで幅に
もならぬ様な断片や落款などの無い
漫草や草稿様のものを總稱する、反
故と云へばツマラぬ物の様にも聞え
るが、此内にはなかく容易ならぬ
ものが包含されてある、殊に此の部
類には名家が戯れに筆を揮つた者が
あるから趣味は却て立派な幅などに
較べて深いものがいくらもある、随
つて反故集めを道樂として居る者が
多くある、
達摩 佛像の内、手廣く集める

道樂のあるのは達摩である、木彫で
も陶製でも繪畫でも達摩でさへあれ
ばいくらでも集めるが、此の達摩も
なかく、數の多いものである、自分
の知人中には森盛一郎と云ふ人が此
道樂を造つて居る、
羅漢 も佛像中に受けのよいも
のである、殊に女人趣味の方面に受
けて居る、羅漢は面貌骨格が奇古で
雅趣がある所からおのづから羅漢癖
と云ふが起り、此數寄者は羅漢の幅
や羅漢の像を集めるばかりでなく、
茶器や文房などにも或は之を畫が
き或は之を彫り、或は内内に
羅漢堂などを建てて居る人もあつた、
人丸 の像を道樂とする人は歌
人に多くある、尙ほ此の外に惠比壽
大黒大を集めるのは俗な方面で盛ん
に行はれて居る、
肖像 廣くあらゆる方面の肖像
を集めるのも一ツの道樂である、樂
翁公は集古十種に幾ばくの肖像など
はなかく、集め難いものであるが、
そこに又珍なる所もある、此の道樂
は人物の繪が書ける畫家に往々ある
自分の知人では博物館に奉職して居
る人が幾十年刻苦して今迄多く知ら
れぬ名人の肖像を多く寫して居る、

矢張此の趣味

何に寄らす小品のみを好む、此の數奇者の珍とす

打方いろいろの工夫がある、打紐の外に革紐もあり、鎖などを

また幾らか残つて居る、市川團十郎などは香道樂で毎月巨額の拂ひをし

は、僅に給はがきの祖と云ふてよろしい、サヤ形の空押し口紅の半切や

などの類實に數限りもないほどあつて、近頃では此の趣味の雜誌も刊行

がある、すべて高麗陶器のみを玩ぶ人もあり、青磁ばかり玩ぶ人も

芝居 観劇を道樂とする者は無数あるが劇に關する者、例へば俳優

古文書 と云ふても、矢張り手簡が大部分を占めるが、徳川期以前

道樂のあるのは達摩である、木彫でも陶製でも繪畫でも達摩でさへあれ

帯

衣服の内でも道樂の多くある、男女共に帯である、これも通

箱

これは經箱、經置、文庫、面箱、筆箱、鏡箱、古鏡箱、狀箱、鼓

香

昔し香道の流行した頃、香木の需用はなか／＼盛んなものであつ

書簡箋

昔の半切にもいろいろの意匠が凝らしてある、繪半切

星器

古時の櫛や、とかげや分銅や尺を集める道樂がある、櫛の

護符

これは一ツは迷信からも來て居る、諸國を遍歴して神社佛閣を参拜する

有職

有職故實と云ふものは朝廷の典例として大切であつたから、

古裂

古金襴や布類の標本を集めるものがある、幅の表装や茶器の

更紗

前と似た者ではあるが、おのづから一類を爲す程道樂の多い

手紙

古人の遺簡を集める道樂も廣く行はれて居る、これも際限な

反故

手紙も古文書も反故と云へば反故である、反故と云ふ範圍は

古文書

と云ふても、矢張り手簡が大部分を占めるが、徳川期以前

江戶趣味

此の道樂は此頃に至つてしきりに流行する、江戸時代の風俗も今では歴史的のものとな

漆器

此種の道樂は多く注する要は無い、堆朱蒔繪のごとき貴重品

陶器

此道樂も餘りに手廣に行はれ、誰も知つて居るから多く

芝居

観劇を道樂とする者は無数あるが劇に關する者、例へば俳優の錦繪、芝居、番付、脚本、繪本、

手紙

古人の遺簡を集める道樂も廣く行はれて居る、これも際限なくある者であるから、あらゆる方面

反故

手紙も古文書も反故と云へば反故である、反故と云ふ範圍はなか／＼廣い、大抵書畫などで幅に

達摩

佛像の内、手廣く集めるものがある、封筒にも同様意匠を凝らしたもので、多く當時有名

古裂

古金襴や布類の標本を集めるものがある、幅の表装や茶器の袋などに必要もある所から標本帖が

更紗

前と似た者ではあるが、おのづから一類を爲す程道樂の多いのは更紗である、これは無論渡り物

手紙

古人の遺簡を集める道樂も廣く行はれて居る、これも際限なくある者であるから、あらゆる方面

反故

手紙も古文書も反故と云へば反故である、反故と云ふ範圍はなか／＼廣い、大抵書畫などで幅に

古文書

と云ふても、矢張り手簡が大部分を占めるが、徳川期以前のものになると多く古文書と云は

江戶趣味

此の道樂は此頃に至つてしきりに流行する、江戸時代の風俗も今では歴史的のものとな

漆器

此種の道樂は多く注する要は無い、堆朱蒔繪のごとき貴重品を初めとし、宗哲の如き名工の作

陶器

此道樂も餘りに手廣に行はれ、誰も知つて居るから多く在せぬ、此中に特に高麗道樂と云ふ

たす、矢張此の趣味
居る、

小品

何に寄らず小品のみを好む道楽がある、此の數奇者の珍とするは豆と名のつく程の小品であつて茶器でも本でも文房器でも、小なるほど愛する、但し玩具と混してはならぬ、玩具に小なるものあれど、此道の數奇者はそれを取らぬ、必ずわざと小形に作つたものを取る、これ等のものは、同様の大きな物を作るより非常に手数のかかる者である、數奇者の喜ぶ所は乃ちそこにあるのだ、

紐

衣服の好に吳服道楽のあるは言ふ迄もない、羽織の紐の道楽は特に言ふほどの者がある、所謂通人と云ふ範圍にも、紐の意匠に没頭して居る者がある、概して紐は打紐であるが、打方にいろいろの工風がある、打紐の外に革紐もあり、鎖などを

帯

衣服の内でも尤も道楽の多くあるは、男女共に帯である、これも通人やシャレ者の道楽である、故人守田勘彌のごときも此の道楽があつたと見へる、帯ばかり箆奇二種もあつたと云ふ、

箱

これは經箱、經匱、文庫、面箱、筆箱、鏡箱、古鏡箱、狀箱、鼓箱、硯箱、煙草箱、香箱、用捨箱、寶篋箱、藥箱等に數の多いもので、用に応じて形式や意匠が異つて居る所に趣味もあり、應用の利く者であるから調法でもある、骨董を弄ぶ人などは年中茶器の古箱や幅箱を採りて居る、相當の箱がつくと器物や書畫の品位がウンとあがる、

香

昔し香道の流行した頃、香木の需用はなかく盛んなものであつた、伽羅を懐中して居らぬものは紳士で無かつた位だ、随つて此の道楽も盛んであつた、香木が長崎へ着すると、諸侯がこれを得るに競争した程のものであつた、多くは熱帯の島に産する香木の一種としてあるスモータラと云ふ者はスマトラ産であるのが今分つた、此道楽は今日廢つたが

量器

古時の杓や、とかげや分銅や尺を集める道楽がある、樹の年輪が刻むであつたり、おもしろい格印が捺してあつたりして古色蒼然たる味を珍とするので、數奇者はこれの種を草堂などに應用して居る、樹の順序を集めた者は學術上の資料ともなる、尺も正倉院の御物を寫したるものなどが珍とされる、これにもいろいろの種類がある、此の道楽は學者側にも多くある様だ、

護符

これは一ツは迷信からも來て居る、諸國を遍歴して神社佛閣を參拜する社中などには無論あることだが、それも道楽では無い、これを道楽に集める向は珍しい守札をあつめる、昔甲信を著した時代には守札を、者に種々の意匠があつた、彫刻物にも趣味のある者が少なくない、例へば米粒大の者に惠比壽や大黒大を刻むた者などは多く人が知つて居る

書簡箋

昔の半切にもいろいろの意匠が凝らしてある、繪半切

有職

有職故實と云ふものは朝廷の典例として大切であつたから、昔しは極めて、八ヶ間しいものであつた、今は多くこれ様なものだ、が有職に關する者も今もしきりに集める人があつた、國學者細くは書家などにある、書家は歴史書などを書く参考にと集めるのだが、終に一種の道楽となつて、盛んに熱中して居るものもある、寺崎廣業、下村觀山なども皆此の道楽を造つて居る、

江戸趣味

此の道楽は此頃に至つてしきりに流行する、江戸時代の風俗も今では歴史的のものとなり、音有り振られたものでも今は、珍しく感ぜらる者がいくもある、例へば當時の看板や、千両箱や、行燈やうどん箱や其他繪物や芝居の立看板

軍書

軍談や軍書を讀み且つ聽く道楽は特にこゝに集るにも及ばぬが、爰に昔或る範圍に行はれたのは軍談物若くは講釋師の種本を多く寫して興がつたことがある、如何にも香氣な道楽であるが印刷術の進まなかつた時代には寫本のお蔭で今尚此類のものが幾らか保存されて居る、併し今は此の道楽は全く廢つた、

武器

刀劍は別に一類として掲げたが他の武器殊に古代武器の蒐集を道楽として居るものが今も多くある、此の部類には鎧兜を始めとし、あらゆる物、弓砲の如きものでも包含する、徳川家内此の道楽を現に造つて居らるゝ人があつた、

漆器

此種の道楽は多く注する要は無い、堆朱蒔繪のごとき貴重品を初めとし、宗哲の如き名工の作を珍とする、

陶器

此道楽も餘りに手廣に行はれ、誰も知つて居るから多く在せぬ、此中に特に高麗道楽と云ふ

羅漢

も佛像中に受けのよいものである、殊に文人趣味の方面に受けて居る、羅漢は面貌骨格が奇古で、雅趣がある所からおのづから羅漢像と云ふが起り、此數奇者は羅漢の幅羅漢の像を集めるばかりでなく、茶器や文房などにも或は之を畫する或は之を彫り、或は室内に羅漢堂などを建て居る人もあつた、

人丸

の像を道楽とする人は歌人に多くある、尙ほ此の外に惠比壽大黒大を集めるのは俗な方面で盛んに行はれて居る、

肖像

廣くあらゆる方面の肖像を集めるのも一ツの道楽である、變翁公は集古十種に幾ばくの肖像などはなかく集め難いものであるが、そこに又珍なる所もある、此の道楽は人物の繪が書ける畫家に往々ある、自分の知人では博物館に奉職して居る人が幾十年刻苦して今迄多く知られぬ名人の肖像を多く寫して居る、

芝居

觀劇を道楽とする者は無論であるが劇に關する者、例へば俳優の鋪繪、芝居、番付、脚本、繪本、繪看版、衣裳、カツラの類に至るまで道楽に蒐めるものが多くある、坪内逍遙博士の如きも脚本作者であるから、圖書の部類は何彼れとなく集めて居らるゝ、西洋の劇に關する者も此部類に屬するが、日本にはまだ多く集めて居る人が無い様だ、

手紙

古人の遺簡を集める道楽も廣く行はれて居る、これも際限なくある者であるから、あらゆる方面の遺簡を集めることは困難である、多くは好む所に偏して集めて居る、例へば學者、畫家、俳人、歌人と云ふ様な鹽梅にそれ集める、勿論學者と云ふても漢學者もあり、國學者もあり、畫家と云ふても南畫家と日本繪師と云ふ様に區別があるからそれ、方面を限つて集めて居るが、唯だに古人の遺簡のみでない、現在名家の書簡を集める道楽が却つて多くある位だ、

古文書

と云ふても、矢張り手簡が大部分を占めるが、徳川期以前のものになると多く古文書と云はれて居る所から類を分つが例となつて居る、これは多く古社寺などに傳はり、武家や由緒ある家に傳はつて居る者で歴史の資料として大切なものである、隨つて史的趣味とする人が抵ね集めて道楽とする、併し書畫や茶湯を趣味とする人にも此の道楽がある、慶應出身の岡本貞徳は此の道楽を造つた、岩崎家のために重野博士が多く集めたこともある、

反故

手紙も古文書も反故と云へば反故である、反故と云ふ範圍はなかく廣い、大抵書畫などで幅にものならぬ様な斷片や落款などの無い漫草や草稿様のものを總稱する、反故と云へばツマラぬ物の様に聞えるが、此内にはなかく容易ならぬものが包含されてある、殊に此の部類には名家が戯れに筆を揮つた者があつたから趣味は却て立派な幅などに較べて深いものがいへる、隨つて反故集めを道楽として居る者が多くある、

達摩

佛像の内、手廣く集める

普請

別荘を作つたり家を改造したり、いろ／＼の工風の建物を作るのを以つて消樂とするものが金持に多くある、これに附帯して作庭道樂もある、樹木や石や石燈籠を集める道樂も皆此内に包含せらる、

植物

にもあるのは盆栽では蘭、萬年青、松、梅、菊、石菖、朝顔などの類で、近年は高山植物を集める消樂が起り、又野草ばかり集める消樂も起り初て徳川頼倫侯は、此消樂を遣つて居らるゝ、現に大磯の別荘には附近卅里四方の野草千種程も集まつて居る。

禽獸魚

の消樂には鶴などを飼ふのもあるが、多くは小禽を飼ふが消樂となつて居る獸は主に犬だが大規模に種々の獸類、猛獸までも飼養するものがある、或ひは今後其種を絶たんとする獸、例へば狸などを飼養する人も居る、又魚の消樂は主として金魚と鯉などである、

参詣

古社寺に参詣する目的が信仰的であればそれは消樂とはせぬ、信仰の意味でなく、又造營物や佛像其他古美術の研究などの目的でなく、趣味一方に著名の寺社を訪問する消樂がある、これに附加を要する

見物

を道樂として居るものも無難澤山ある、観劇相撲其他所謂見物、各種の展覧會、活動寫眞の類を包含する、

旅行

此の道樂の中にも山岳の登攀、名勝探訪、或は探検、洋行をも包含する、

食物

所謂喰ひ道樂の範圍には菓子、茶、酒、煙草、其他あらゆる料理を包含する、

乗物

馬に騎る、舟にのる、自動車、飛行機、飛行船に乗る道樂を云ふ

漁獵

或ひは自ら、或ひは人まで勞して魚を網し、或ひは釣を垂れ或ひは獵期に銃を擲へ山、野にかけまはる、

衣裳

男女おめかし屋に此道樂あるは云ふまでもない、西洋の服装も包含する、

音曲

謡曲並に俗曲を聴き、若くは自ら謡歌を道樂とする者

繪端書

外國の繪端書のみを集むる人、郵便に托したる者のみを集むる人、繪はかきとし云へば何れも致でも集むる人さまざまあり一種繪畫の趣味から來た道樂で絶えず是に没頭して居る者がいくらもある、決して兒女などの戯れにやる道樂でなく、有聲の人の眞面目に遣つて居る道樂である、

郵便切手

前項と似た様な道樂である、世界各國の現行の切手の種類丈でも意外に多くあるが、既に發行されたものとなると愈上敷が多く、中には頗る得難い物もある偽造を防ぐ意匠にも様々あつて、此點は形こそ小なれ紙幣と趣を同する、多く世に知られぬ島嶼などで發行する者杯を抵ね珍として居る、

寸燧のペーパー

これら前と同じ脈の道樂である、ペーパーは寸燧製造所により皆異なるは勿論、得意の嗜好先により同一製造所で色々の意匠のペーパーを作るから其数は實に夥しいものである、矢張り寸燧製造の幼穉時代のペーパーや現に廢社となつた幾十年前の製造のペーパーなどが尤も珍とされておる、

名刺

或る方面に自己の名刺をいろ／＼に意匠を凝らして居るものもある、例へば細長のものを作つたり、フチ切らずの紙を用ひたり、金縁をつけたり、スカンの紙を用ひたり文字に就ても種々の好みがある、寫眞 職業にあらすして趣味的に寫眞機を操縦するものが年一年と盛んになり且つなか／＼發達して來て營業者を壓倒する様な傾向がある位、此の道樂は各方面に行はれつゝあるは誰も知る通りだ、

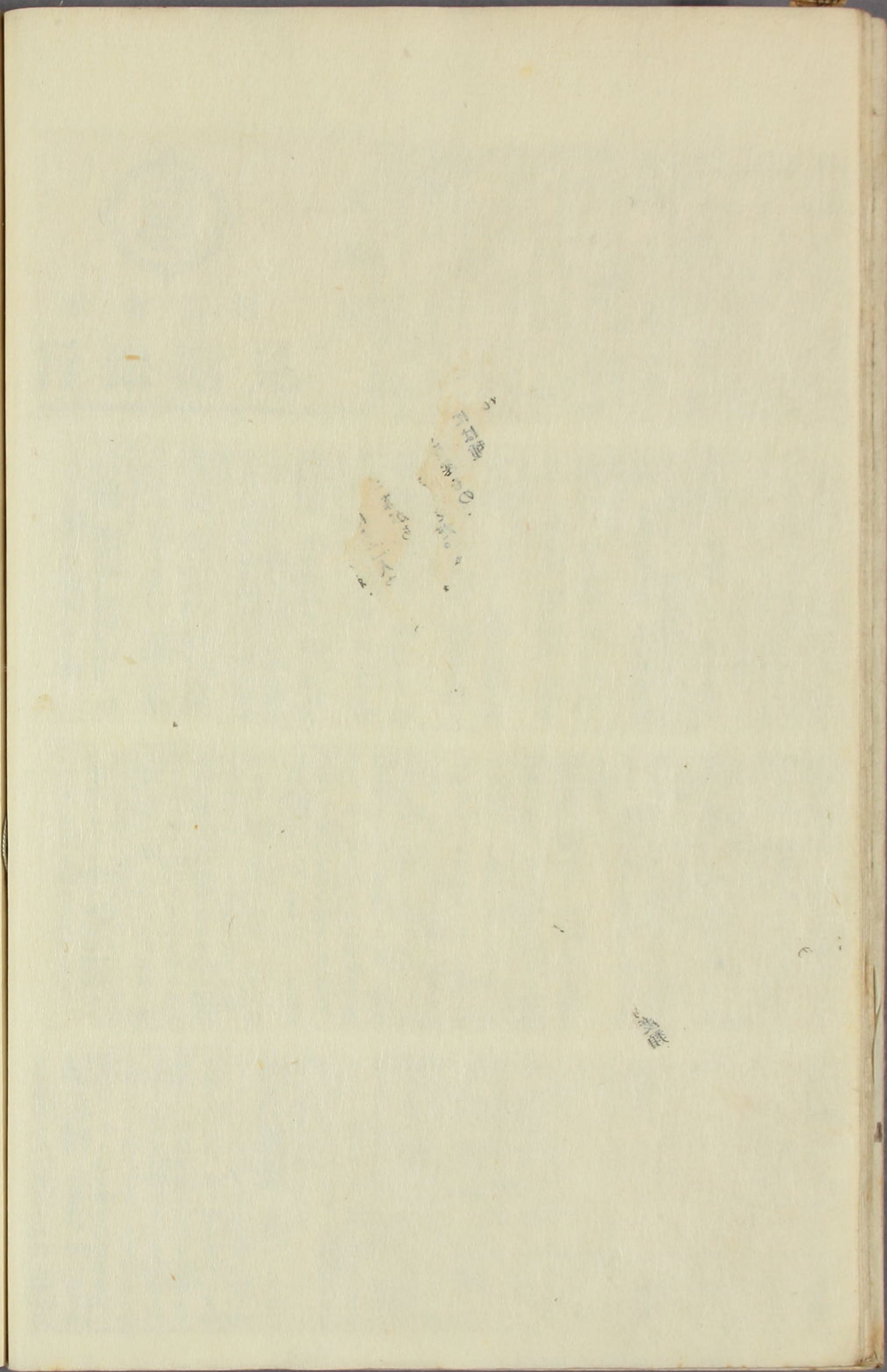
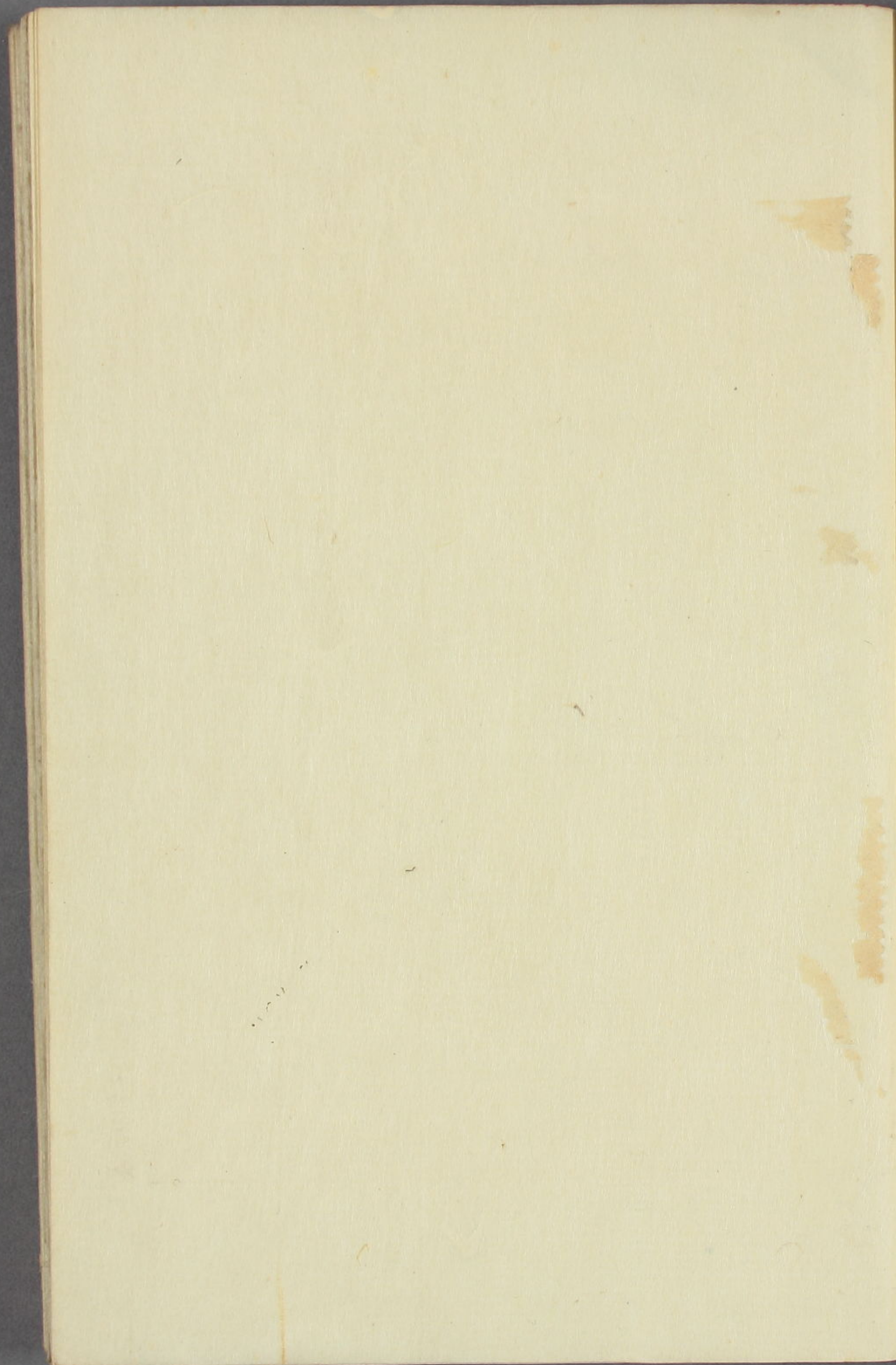
手帛、香水、指輪

此等は主として婦人の道樂である、寶石金屬の指輪に好みのあるは言ふ迄もなく、廉からざる道樂で、香水ハシケチの如きでも一驚を喫するほどの高價のものがある、所謂新らしい女の道樂は是等である、

西洋遊戯

近年ベースボール、テニスの如き西洋遊戯が先づ學生間に行はれ、追々學生以外にも行はれて、之れを自ら行るを道樂とする者との之れを觀覽するのを道樂とする者が多く出て來た、之も新らしい道樂の一つとして擧げねばならぬ、紀念物 大事件 例へば大典とか戦争とか大震災とか云ふ場合の

新聞紙、繪はがき、旅行先から紀念物にとて何くれとなく其土地の物産類などを集めるものいくらもある、殊に外國あたりを漫遊する人の内に到る處さき／＼紀念品をあつめて持ち歸る人が多くある、蠻島などではいろ／＼風俗の相違より、妙なものが多くある、それ等は價の高からぬものもあり、何人も一寸面しろく思ふ所から紀念にとて大抵の人が持ちかへる、すべて此等は紀念物道樂の部に入る、(をばり)



以下
17丁
白紙

衝口發 (一)

春城學人

病軀を冒して歸省したが、怎うもまだ具合がよくない、大多忙中の身體を空しく旅館樓上に床上禪をキメ込んだゐて無聊に苦しむのは全く困つた譯であるが、斯うして活動も出來ずに寝てゐるから比べると、少しはお喋りでもした方が意屈せぬ丈け増しかと思ふ、そこで新年の新聞新聞に「衝口發」と題して例の雑談を試みた儘、それを續がずして今日に及んだ關係もあるから、今度其談に續續させる心持で本稿を書く、衝口發は讀んで字の如き出鱈目でホンの座興的に本紙記者の來訪に際し斷片的に話したことを纏めて見たものに過ぎぬが、萬事は肩の凝ぬところが身上には、樂隱居の茶吞嚙と、胸中樂地ある人は讀むも可し、俗事に忙しいものは讀まずともよい。

自分の良寛觀

◎悉く廿年間の作

◎越後へ来て眞先きに出さうな話には、左様さア先頃東京で開かれた良寛會なども其一つであらう、此良寛會が自分に與へた印象は或特殊な

ものがあつたが、それは後で話すとして、アノ會は郷土の爲めに實に一大光彩を放つたもので自分等越後人として頗る愉快に耐なかつた、何しろ坐らにして越後に於ける良寛關係の墨蹟二百點以上をば、一堂の中に見ることが出來たのだから…… ◎これは實に越後人として望外の幸ひであつた、良寛といふ一人物の爲めに何程郷土を中央の首都に紹介し得たかは眞に想像の外に在るが元來良寛は備中玉島の圓通寺の住職が來越した時之に隨つて備中に起き圓通寺に寄食すること十六年、此間に桑門に參じて研究を積んだのだ、修業時代は此時であつたと思ふ、然るにアレ丈けの文藻や筆蹟を行したものが此永い備中時代に一つの詞章も文字も残してゐないのは聊か不思議とせざるを得ぬ、尤も秘かに傳はつて居る一語は、一夜泥棒と間違へられて捕へられたが、良寛更に其免を辨せず、黙々一語なくして自若として其爲すが儘に任せてゐたのを、傍に知る人あつて分疏して呉れたので、漸く汚名から免れたといふので、これ等は眞に良寛其人の面目躍如たる面白い話であるが、書畫文章の如き一つも備中に残つて居らぬ ◎そこで今度良寛會に現はれたもの

はといふと前に言ふ通り二百點以上であるが、まだ此外に越後に残つてゐるものも略之と同數位はあらうと思ふが、そんなにも多くある越後の良寛物は、彼れが玉島から歸國して歿する迄の二十一年間に書き残したものと見るべきで、即ち今日残つてゐるものは、殆ど悉く其晩年の作品と見るのが至當だ ◎それにしても、乞食同様の一向構はぬ服装をして、人にも乞食坊上と言はれてゐた良寛の墨蹟……殊に俗衆には喜ばれぬ書風の……が、而も二十一年間の物のみで如何にして斯く迄多く其郷國に保存されてゐたかを思ふと、實に不審のやうでもあるが彼れを一介の寒僧のみと嘲つてゐる者も多かつたと同時に、其人格に推服して、窃に敬意を拂つてゐたものも亦甚だ少くなかつたことが察せられる ◎以上は大體人の知る所で、之が何もある他人の觀察と自分の所見とに相違があるといふのでは無い、其相違點は別に在るのでそれは追々と話すことにせうが、茲には先づ良寛の名が帝都に喧傳した其経路を振り返つて見て、如何なる順序で彼れが今日の如く中央に知らるゝに至つたかを、一つ話して見やうと思ふ



衝口發(二)

春城學人

自分の良寛觀(二)

中央への紹介者

良寛の名が早く既に江戸時代に於て田舎にも斯の人ありと知られた其始めは何か動機か、彼れが龜田鶴齋に推服してアレ丈けの人でも胸襟の書風を學ぶといふ氣になつたことは世人の知る通りだが、此關係から鶴齋が江戸に良寛の名を紹介した先驅となつた、これは自分の言はずとも知れ切つた話

それを得所が借受けて上京した、書道關係者、而も東京と越後の中間に在つたもの、手に依つて中央に良寛の名が取次がれたといふのも面白いが、即ち之が帝都に良寛の名を知らしめた第二回目だと自分は信ずる

た第三回目であるが、更に四回目的の、即ち今度の良寛會であると見るのが至當であらう

自分の良寛觀(三)

春城學人

世間の見る目と、自分の見る目と良寛觀の違ふ點は、良寛を以て磊落不羈、一向物に傾着せぬ仙人肌の人(わるいへば一種圖ぼらの男)であつたと見るのが殆ど従来の定評で、自分と雖も多年同じやうな觀察をしてゐたのであるが、今度良寛會が開かれ一時に多數の良寛物を見たと同じ時に忽ち自分の良寛觀は其根底から覆へさねばならなくなつた

上に、其草稿類が如何にも秩序整然として極めて細心に書き留られてゐることで、詩などになると謙遜な措書で書かれ、歌もムヤミに塗抹などはされて居ない、斯ういふ珍らしい筆蹟を見るを得たのは、眞に良寛會の場で、自分は斯うした遺品から良寛を以て決して粗放自ら喜んで更に細事に注意せぬやうな人物ではな

代の庄屋に生れた、其土地の名門であつて常に實際に携はつてゐた家ではあり、其永い間には随分人に景慕されたこともあらうが稀にはヤリ損ひもあらうといふもの、まして一方に同情があれば他方に反感が起るの

高い所を覗つたものと見え秋萩帖を非常に深く研究したものらしい、現に良寛會で見た一二のものにも秋萩帖を臨摹した痕跡が歴々たるものもあつた、世上何人も彼れが書風の出所を以て「懷素」とばかりいふて居るが少しも秋萩帖の感化に注意する人はないやうである、併し彼れが懷素の書に私淑したのはズと後年のこと

◎良寛は人も知る出雲崎に於ける歴とせう

策ではあるまいか、イヤに堅苦しい
事ばかりで本統の奨励や普及が出来
る筈はない。
◎英國のピラから不圖日本政府の餘
りに野暮なことが情なくなつて、
えずこんな話になつた譯である。

春城學人

理想的成金ぶり(一) 先づ其の條件

◎戦時の影響で成金が續々減る、
随つて世間でも成金々々と羨むもの
や減るものが多いやうだが、そう一
概に成金と輕蔑するのは宜しくない
一面から言へば成金は成功者で、國
家の爲めに寧ろ成金の進出を望むべ
きた、アメリカは久しい成金國だが
日本は今度新に大金を持つて見たの
で、之は誠に喜ぶべきことと思ふ、
だが茲に考へて見る必要のあるのは
所謂成金が如何にして其金を費ふべ
きかで、彼等は多く其方法を知つて
居らぬやうである。
◎成金の費ひぶりで、遊蕩放恣は言
ふ迄もないとして、少し氣の利いた
ところでも一時的に名を賣らうとす
る目的の爲めに天下を驚かすやうな
巨額の寄附をして快とするくらゐの
所だ、併し願はくば今少し他日に殘
るとか或は多數の爲めといふことに
着眼してもよからうと思ふが、自分

は會つて餘計の事乍ら成金の爲めに其
使ひ途を考へて見たことがある……
イヤ我乍ら物好きな話さ。
◎それは四つ五つあるが併し其前に
少しばかり條件を出す必要がある、
即ち成金の出す金であるから彼等自
身も亦満足するやうなことでなけれ
ばならぬ、いくら傍で利益を説いて
も本人が心からソレは面白いと思ふ
やうなことではなければ不可ぬ、それ
には甚だ失禮だが他の學者文士に望
むやうなことではなく、ヤハリ何處ま
でも「俗的」なものであつて、派手で
大規模で、同時に其人の名聲も引く
知られると言つたやうなこと、其上
其計畫の爲めに儲かるといふやうな
ことを忘れてはならぬ。

◎ト先づ其範圍を定めて置いて、落
然らば何が最も適當か、試みに其の
一二を挙げると、先づ東京の如き全
國の首都に大會館の設備無く千人以
上も集まるとなると常に其の場所に
困る、國技館が一番宏大であつたが
之は焼けた、爾來多數集會の時俄
にバラツク式のものを作つて不完全
な所で平捧してゐるが、此缺陷を補
ふべく大集會場を作るなども一例で
あらう。
◎又昨今我國に大に勃興してゐるの
は西洋風の遊戯場……野球のグラウ

ンドといつた類が各所に必要を訴へ
てゐて早大あたりの催しにも三萬五
萬の人が来る、若し之が東京全市民
の大運動會とか、市民大會とかいふ
場合であつたら適當な野外集會場が
東京中に絶無である、處で地を相し
て十萬の人を容れ得るグラウンド兼
集會場を作るなども、前に挙げた條
件にも合つた適當な仕事ではなから
うか、此他に長岡市の野木翁が前年
唱へた富士山を中心として一大公
園を作るなども甚だ妙で、之等の類
は考へて見るとまだいくらも出
て來ることと思ふ。

理想的成金ぶり(二) 一大海水浴場

◎併し自分が最もよからうと物に思
つてゐることは、外でもない、完全
に設計された一大海水浴場を新たに
作ることである、それに就て愚案の
大體を話そうが、マアゆつくりお茶
でも入れてからのことにせう。
◎一大海水浴場、それは最も我國に
欠けて居るもので、聞く所によると
外國人が來朝して失望する第一は金
の使ひ所に困る點で、折角風景美に
撞撃してやつて來ても、どう遊びど
う費うかの方法が無いと言つて零す
そうだ、そこで日本で彼等を待つに

相當の方法を以てすれば、來遊外人が一年に幾千萬の金を落して行くかは明かな話で、自分が此説を持ち出したのは之が爲だ。
◎但此の海水浴場を日本流のそれに解して貴つては困る、西洋の浴場は海面に何町といふ長い突堤を突き出すとか、其處へ大旅館を幾つも幾つも建て娯樂機關を完備し飲食其他も充分供給し得るやうになつて居る、故に風景に秀でた行通に都合のよい海岸の浴場は其収入實に莫大なるものである、日本でも之に倣つたら人を喜ばせて而も儲かること疑ひ無しだ。
◎然らば日本では何處が一番海水浴場として適當な場所かといふと、自分はその知り得る限りに於て別府の温泉地唯一個所を挙げる、別府は九州の一端で海を隔て、支那全土を前に控た所だから此方面より來るものは皆來るといふ四通八達地、世界の公路ともいふことが出来るやう、風光は瀬戸内海に通ずる水路に向つた絶勝で、それに温泉に當むこと全國無比、源泉は海底からも湧き出る、海の砂を堀ると其處からも湧く、浴場も頗る大規模のものが幾棟も建られ海水を自在に引き入れ得る好地形

恐らく浴場として海内此處に優る適地は又とあるまいと思ふ。
◎既に此の好場所あり、此上之を西洋式に設備を改め、萬事遺漏なく注意して遊覽の客をヨリ以上喜ばすやうに仕向けたならば、それこそ國內の旅行家はいふに及ばず、世界の紳士淑女までが争ふて我別府に來遊し衣香帽影、満目の樂園を現出するのとであらう、隨つて之より得る収入のイカニ多かるべきかといふことも亦想像に餘りある。
◎尤もそれには巨多の資本を卸さねばならぬ、之位にまで土地の面目を改めさすには五百萬乃至一千萬ぐらゐは勿論要する、が斯くして毎年々々世界の人を引くことが出来るからそれが驚くべき大利益となつて返つて來ることも疑ひない所である同時に經營者の懐を温めるのみに止まらず、國家經濟上亦甚だ喜ぶべき結果を生むに違ひない。
◎成金の使ひ途として自分が一番よからうと思ふのは即ち一大海水浴場の設置で土地としては別府に限ると信するのだが、併し十人十色の世の中、人により場所によつてまだいろいろの考へを集めて聞くは興味の深いことだと思ふが、先づ自分の考案

を二つ三つ提出して世の批評を待つ次第である、幸に成金諸君、一番奇抜で且つ有益な大計畫を残して見る氣は無いものか。(此項完)
◎先頃廢帝になられた露國のニコラス皇帝は、意外に庸暗の人であつたといふものもある、アノ革命も其爲めであつたのか或は國家が衰遂に傾いて人力の如何ともするに由ない結果であつたか、或は二者其因を爲して居るのか、其詮索は別として、此人に就て我々の先づ念頭に浮ぶのは即ち日本に來遊された際、朝野を震駭させた例の大津事件である。
◎あの時代に於ける日本に在つて、一巡査が國家の大寶……而も強國の君主に兇器を見舞つたといふことは飛んでもない大事件で、全國を擧げて其影響に不安と恐怖との胸を抱いたも無理は無かつた、然るにそれが案外に具合よく收まつたといふのも或は帝の庸暗といふことが多少原因を爲してゐたものかも知れぬ又其頃から露國の國勢が幾分弱つてゐた關係かも知れぬと思ふが、當時に在つては弱小の日本、彼の國の味怒を買ふのは國家の運命に關する所が至大なのでヨソ國法を擲るとしても兇

行者を極刑に處して國民の他意なきを示さねばならぬといふことが廟堂全体の一致した意見であつた。
◎自分は當時讀賣新聞を主宰してゐたが、帝都の騒ぎも親しく知つてゐる丈けによく此事變が旨く解決されたものだと安心もし不審もするといふ譯である何しろ聖上御自ら御見舞に向はせられるといふ程で、特別方面からの旨を含んで政府は司直の府に下命し巡査津田三藏を最嚴刑にといふことであつたが、此時係であつた司法官の兒島惟謙は、殆ど死を以て司法權の擁護に當り、願骨頸節、一步も譲らず、最も適法の裁斷を下し、爲めに當局に諱まれた一事は大津事變を回想する毎に、必ず國民の思ひ及ぶ所であらう、自分は此好漢を當時我日本に有したことを誇りとする。
◎曾て之を大隈侯に聴く、兒島が眞角を現はしたのは明治の初年で、政府に關聯した大事件に森藤有衛門事件といふものが起つた、其際大久保利通卿は兒島に説いて法を枉さずべからぬと、兒島は頑として應ぜず、ヤハリ適法な裁判を下した、此時分から彼が硬節は知られたのであるが併しそれ以來薩派からは酷く呪まれ

遂に兒島は大隈侯に近よるやうにもなつたのだといふが、此關係で後には頗る同侯に親近した。
◎兒島が病重くなつて大隈侯が親しく其枕邊へ見舞に行つた時、兒島は瀕死の枕を擧げ激越昂奮した調子で肉は死んでも喉は必ず護衛を破らさねば止まぬと絶叫し、此一語を發して死んだといふことである、以てイカニ瀧岡が彼を壓迫し、彼れが瀧岡を恨んで居たか分るではないか
◎處で其兒島が此重患を發見したのがヤハリ大隈侯だからヨホド内縁が深かつたとも言へる一日侯と兒島とが相對して鳥鷲を闘はし、對局に夢中になつてゐる所へ、フト入つて來た人は即ち先日物故した醫師青山胤通で兒島が頻りに咳をするので「其咳は不可ぬ、ドレ見せ給へ」と一診して、例の青山流義で遠慮もなく即座に肌患を斷定した、其時は流石の兒島も顔色を變へて非常に落膽したのであつたが、ソレ以來床に就いて果して肺患で斃れて終つた。
◎恰も兒島が其苦害を受けた時であつた、自分も大隈侯に在つて兒島に出會つたが、其失望の餘り憤然として歸る邸下をば一所に歩み乍ら慰めたことが今でも歴々眼前に在るやうだ、其時の兒島の様子は實に氣の毒

なほど情れてゐたが、自分は今でもつくづく思ふ、大隈侯の如き大政治家でも四百年後五百年後まで果して其名が残るかどうか疑問だが、少くとも日本帝國の司法權の歴史に於て兒島の名は永劫に消えまいと。
◎彼れが我司法の權威の爲めに最も高く、強く、又大いなる壓迫を拒斥して、斷乎として其本領を守つた氣節、それは眞に世にも尊いものではあるまいか、彼れの勳功を以てすれば當時既に爵位ぐらゐは得て居るべきに、男爵をすら授けられず未路慘憺の觀があつたは、返すくも同情に耐へぬ……が併し瀧岡の籠によつて微々たる勳位を得るが如きは寧ろ彼れの本意とする所でなかつたかも知れぬ。
◎國民の歌、即ち公衆が歌ふべきナショナルソングが國家に大切なことは世の進むに伴れて益々我國民にも理解されて來たやうだが、國民性發揮の上からも國民精神吹の上からも其必要は言ふ迄もない、然るに日本には國歌として見るべき雄大なものを有たぬ、強て言へば「君が代」がそれに當るが、追々時代も推移した

春城學人 國民歌

今日、之れが果して國民の歌として有力なるものであるや否やは疑問であると思つて居る。

◎國民歌といふ以上は時代人心に相應したものでなければならぬ、隨つて之を作るには餘程力を要したもので、百代の後裔儼乎として傳はるべきことを期さねばならぬ、一日多數に傳唱されると最早之を改めるといふ譯には行かぬものであるから。

◎小さな例ではあるけれど、アノ早稲田大學の校歌なども今より二十幾年前に運動會をやる爲めにホンの一時的に作られたもので格別感心したものでもないが、それが早大の範圍のみならず、東京全市から地方にまで傳はつて誰でも之を歌ふやうになつて見ると、わるい所があるからとて今更それを改めるといふことは非常に困難なることになる。

◎此例から考へても、苟も國民の歌たる以上は、多大の苦心を経た上で一字動かす可からずといふ完作でなければならぬ、スコットランドの某詩人は「國民歌を作るは法律を作るよりも偉大也」と言つたが蓋し名言である、其國民性鼓吹の感化力からいへば法律如きもの、此では無い、何時までも「君が代」ばかりに甘んぜ

ちから戀しい、「それでは早速借覽を」となつて、やがて知己の盡力で借りて來た一幅は、紙表装の古ぼけた粗末なもの、何だらうと少からぬ興味を以て懸けて見ると其文字は左の通り

忠孝節義

己巳仲秋與市嶋雄之助

◎自分の眼には之を見ると幼い昔がアリ、と浮んで來る心地がした、雄之助とは自分が六歳頃までの幼名で、此書は其頃止に自分が貰ひ受けたものであつた、それが農家一而も母の居る筋向ひの家に永い間残つてゐたのを今迄知らずに居たのも妙だが、之は何れ自分の家が東京へ移るに際してガラクタ道具と一所に賣つた中に交つて他人の手に歸して居たものと見える。

◎それはマア兎に角として之を書いた源誠とは何人か、之ぞ秋の嵐で有名な前原一誠其人なので、前原が直接自分の爲めにとて幼童には適當な「忠孝節義」の四大字を書して呉れたものであつた。

◎幅は幸に今度自分の手に戻つたが之に就て前原と自分の關係を話して見やう、今いふ通り自分は六歳頃まで英雄の一字を冒して雄之助と

すモツと豪壯な雄大な國民歌を得たものである。

大隈侯と洋行

◎人は境遇によつて不思議な運命にも會ふもので、今日では何でもないことのやうだが、頗る偉い人でも、足一たびも外國の地を踏まずに終るものもある、大隈侯の如き即ち是れだが、併し侯は外遊者以上の外國通だから驚く、殊に坐らして歐米第一流の人に交はるなども甚だ異例で實に西洋を股にかけて歩いて來た人に比しても遙に世界の大勢に通じて居る。

◎處で侯は既往に於いて絶對に外遊の機會がなかつたかといふと、それは好い機會もあつたのだと聞く、侯の直話に慶應年中、佐野常民侯が洋行したことがある、其の際佐野侯に於て異數なる政治家であつた大隈侯に是非同行外遊するやうにと全藩から勸められたものであつたが、侯は折柄國家の風雲急なる時で木藩を始め日本の將來がどうなるかといふ時世なので、此重大な危局に際し悠々洋行などして居られるかと直に之を諍したので、其の時絶好の機を失して以來、遂に外遊の事なくして今日に及んだものだといふ、機運と

つてゐたが、休養が弱かつたのか頻りに驚風を患すので或學者が雄の子では病難を根治することが出来ぬ上杉謙信の謙の字がよからうといふので即ち今の名に改めたが、妙なことに其後病氣に罹らなくなつた、風が其後長じて筆を載せて高田新聞を興す爲めに東京から越後へ歸る時友人山田眞雨が自分を送る長篇の詩を作り自分の爲に印を刻して贈つて呉れたが、高田へ行くのだからとて春日山から思ひついで春城といふ雅號を選んだ、眞雨は固より唯夫だけの因縁で春城の號を贈つて來たに過ぎないが、自分としては雄之助の雄も謙も春城も共に謙信に深い縁故のある文字で、自分一人が越後の英雄を諷刺したやうだとは時々友人と會して笑ひ話にして居ることだ。

◎處で今此幅に就ても知己と共に話したのであるが自分は萬延元年二月十七日の生れで、時は是れ國家の大變局、恰も其翌月を以て井伊大老が櫻田門外を鮮血に染められるといふ大事が起つた、して見ると其前月自分一人生れた爲に井伊大老の居り場が奪けられて遂に此世を去つたのやあるまいかと……マアこんな他愛もないことを言つて呵々大笑した

いふものは妙なものが、併し侯は此好機を逸したといふことによつて一層外國の事情に通ずるの必要を感じ、努力して遂に洋行した以上の智見を積まれたのだと知つては世間の事は全く何が幸福になるやら分らぬ

衝口發

春城學人

前原一誠

◎自分の母方の村、北菰原郡の中條に小字を西條といふ小さな所があるそこに在る母の家の別荘に庵室を作つて母が住んで居るのであるが、自分は今度の來越に久しぶりで行つて見た、其際舊知の誰彼が集まつて來ていろく、と懐舊談をしたことであつたが、其話中に此家の筋向ひの農家に「妙なものがあつた」といふ、妙なものは何？と自分が反問すると「誰の書いた字か分らぬが君の名一而も幼名が書いてあるから何れ君に贈つたものらしいが、本人が見たら誰の書か直に分らう、取寄せて見る氣はないか」といふのであつた。

◎無論自分には覺えが無いが、記憶せぬ程に古いものだけ、尙更見ぬやうな譯であつた

◎自分は固より眞純な人間ではあるが自分の生立の背景としては頗る大きなものがある、誕生の時は今話した時勢であつて生れた場所は天領水原である、水原は當時天下に雄視した天領で、大官が争ふて任に此地に就かんとしたものであつた、之は富豪の多きこと全國無比の關係から政治上有数の地と見做され第一に豊後府が此處に置かれ、續いて水原縣ともなつた、而も其府なり縣なりは置かれた所は自分の宗家の居た所であつたから、自然坐らにして天下の豪傑をも集中させた、前原が來て自分が親しく其愛無を受けたのも、實に斯うした關係からであつた

前原一誠

春城學人

◎彼れの面目と平生

◎其頃の水原は海内の名士雲の如く集まつたといふのも決して浮誇の言ではない、西園寺侯も來た、七卿の中、壬生基修卿なども來た、其他前原、奥平などを始め續々とやつて來たが、是等の人々は其當時既に何れも大臣格の人物のみだ、然るに足るに郷士を出でざる少年の自分が斯る

人々を郷里に於て見たのみならず、それが悉く我家に起臥したといふ縁故を有つのは實に奇遇であつたと思ふ

○其中で西園寺侯にはツイ二度も逢つたことなく、其後今日までも侯には面接するの機会を得ずに過ぎて来たが、侯も亦自分の家に泊つたもので其書かれたものはいくらかも残つてゐるが、當時人物としての大立物は實に前原が第一であつた

○然るに其第一の人物たる前原が最も長く自分の家を旅館としてゐて而も自分が愛撫されたも不思議な譯で今得た書幅によつて當時を想ふと、斯うした背景を過去に有つてゐる自分、何と偉いではあるまいかと今度も二三の舊知に向つて、笑ひ乍ら聊か威張つて見たのであつた……妙な自慢もあつたものや

○處で圖らずも自分に贈られた前原の書を、今度手に入れたを縁として一つ話して置かうと思ふのは即ち前原の爲人や又面影などのことで、今では其本人に接した人なども稀であらうし、旁々自分は幼少の頃で到底其詳細を語る資格はないが、併し實際親炙した關係もあるので覺束ない記憶を辿つて聊か前原に得た印象を此機會に傳へて置きたい

てゐる或日の事、突然裏門からノソノソと入つて来た一人の男があつた、此男は眼光爛々と人を射るのがイカニモ其面影を物騒らしく見せてゐるのみか其顔は日焼けで眞黒になり、短袴、羽織も着ず、而も靴は足になつてゐて大刀を握み、一見粗野を極めてゐたが、門前から「前原居るか」と無作法に問ふた上、驚く門番を尻眼にかけてツカ／＼と前原の居室に通つたものだ

○之が即ち奥平謙輔で、其時前原と逢つたのは幾年ぶりであつたか知らぬが大分久しぶりであつたらしいに其挨拶は五に「ヤー」とか「應」とか至極簡短なるものであつた、それから奥平は暫く滞在といふことになつて、兩人把臥を共にしたが、前原は前にも話す通り終日黙々一語なき程の静かな人で且つ頗るの朝寝坊なのに、一方の大將と來ては恐ろしい早起きで鶏鳴と共に眼をさますが、前原はまだ寝て居るので徒然に耐えずして寢床の中で詩を吟じたり、本を讀んだりするは可い其聲は漁師見たりやうな大きな聲でイヤハヤ早朝から、騒がしかつたものだ、實際奥平が阿々として大笑する時などは其聲が自分の家の隠宅から本家まで響き渡る程であつた

○前原といふ人は薄利のあつた人で沈黙寡言、始終眠いといつたやうな風でイカニモ所謂大人物らしい態度であつた始終自分の家の隠宅の二階を居室としてゐたが非常な朝寝坊で且つ不精、絶て居室を掃除させない、俸給は其時いくらであつたか知らないが、奉書紙に包んだのを開いて見せず、其儘床の間の薄暗い所の大切な文書の積まれた中へボンと投込んで置いた儘、敢て振り向いて見やうともしない

○そこで此調子を吞込んでゐる人は、如才なく其金を貰ひに来る、スルト敢て數へるでもなく殆ど全部を斯うした無心態に分ち與へて、前原自身は常に一錢も身に着けなかつた、さればこそ其歸國の際などは其旅費までも自分の家の厄介になつたが、尤も此時分は斯かる大臣格の人物の世話を焼くことを光榮ともしてゐたので、自分の家では喜んで調達したものであつた

○其頃前原の所へ伺候した人々は種々種々の贈物を持つて來た、中には大きな鮮魚を三貫の上に載せて來るなども珍らしくは無かつたが、性來無頓着な前原は、其贈り物を坐す右に

併し此正反對の趣ある兩雄が互に友情の厚かつたことは今も尚ほ眼前に在る想ひがするが、此會合の間には如何なる事柄が談ぜられたかは固より外間から知る由もなかつた

○爾來奥平は自分の家と淺からぬ縁故がつき、彼れが佐渡へ行つて後、再び來越した時などは當時自分の家が西條の草深い田舎に假住居と變つてゐたにも拘らず、特に其處まで尋ねて來て暫く滞在したのであつたが、岩船郡辰田村に田家があるので其處へ行つて見たいと言ひ出し、自分等兄弟が同行したことがある、子供心にイカニモ恐ろしげな此人と一所なのは餘り愉快でもなかつたが併し奥平は無造作なうちにも至極親切な氣風もあつた

○何んでも朝早くから酒を飲む、其場合には下物の成るべく多からんことを望んでゐたが、御飯となると凡ての肴などを撤し梅干一つで済ましてふ興來れば頼まれずともよく字を書いて自分等に呉れる、或時は又我々二少年を率ゐて河原などへ散策に出かけるが、斯ういふ時でも必ず大刀を腰にして、犬や猫の來るのを見ると、曳ツと一聲、鞭を走る電光石火に、忽ち之を斬り捨て、我々を顧み乍ら快然として大笑する、まるで大きな腕白小僧の有様であつた

山積して置いた儘で、敢て始末するでもない、併し自分等が夫を勝手にする譯にも行かぬので、魚の如きは三貫の上に腐つた儘で、床の間に數日を経た後結局は棄てられて了ふといふ儘、至つて物にコセツかない鷹揚な性格を具へてゐた

○前原には三人の少年が附いて細かな用事を足してゐた、三人とも紫の括で結んだ切下げ髪にしてゐたが、其内の一人は其後大審院判事として相當の地位に進んだ伊藤博文といふ人であつた、彼前原元來除程子供好であつたらしく、自分などは五六歳の頃だから如何なる人物とも知らぬので「チヨイ」と遊びに行つたが必ず可愛がつて呉れてお菓子を食べさせたり或はいろ／＼と字を書いて呉れたりした、今度手に入つた自分の幼名ある前原の書なども即ち此時の記念なので、自分にとつては無眼の感懐と興趣とを感じる

○話は長くなるが今度は自分が直接見た前原奥平兩雄會談の光景に就て語らう

前原一誠(三)

前原一誠(三) 兩雄相對す

○自分の見た奥平謙輔と前原との會見は今でも鮮かな影を頭の中に残し

衝口發

(三)

前原一誠(四)

其の不平の原因

○併しモウ慣れてゐる我々は少しも恐れず或時は奥平が醉除ゴロリと寝ると共に忽ち聲雷の如く傾る心地よげに熟睡してゐるを見済まし、顔に墨を塗つて戯れなどしたこともあるが、奥平はフト目覺めて之を知つてゐる時でも一向構はず塗らせる儘にさせて置く、大きいといへば斯んな些事にも大きいところが儘に見えてゐた

○自分が奥平に逢つたのは實に此辰田村の田屋時代が最後であつた、前原には秋の亂の起る少し前自分が東京遊學中一度上京して來たので其時在京の叔父と共に彼れを築地の宿に訪ふて逢つたが即ち最後の面會となつた、前原に就いて自分に一種妙な感じを起させることは、前原が越後を引上げて歸る時、自分をも一所に連れて行きたいと言ひ出した……敢て養子といふでもない、子供好きだから同伴したかつたのであらう……が固より家人は斷つたのであつた、そこで若しも此時に自分が前原に伴

れられて行つたとすると、果して今迄生きてゐられたかどうか、間もなく生じた秋の亂に際して安全な運命が待つてゐるべき筈が無い、思ふて迄に至り、更に今度偶然にも得た自分に贈つた前原の書幅に對すると感概に無量である。

○會て大隈侯と共に談たまふ前原の事に及んだ際、侯の話に壯年の頃漸く前原を識つたが彼れは古風な思想の人丈けに明治政府の新政には頗る不平を抱いてゐた、殊に「重税を課するは仁政に非ず」といふ主張から、前原は越後へ來任後、彼れが大巨格たる見識上、中央政府に浴りもせず獨斷で越後に於ける諸税の軽減を決定したものだそうなる。

○當時中央政府では大隈侯などが議時代専ら全國民心の統一を計るべき場合だから地方施政の如きも不整一とならぬやう一々中央の方針に適合さすべき時にも拘らず、前原は一切顧着なく自分の信念をドクドク實現したのであるから幾許もなく彈正臺の彈劾を受けた、其越後を去るに至つたも即ち之が原因で、さらぬだに不平滿々の前原、此一事に愈々政府に嫌らず、除積辭の結果が爆發して果はアノ不穩の舉に出たもの

と見える。

○之も大隈侯の話であるが、當時實際の状態が、政府としては全く前原のやうに地方々々で思ひ／＼の施政をやられては堪まつたものでない所から、彼れを任地より去らしむべしとは廟堂多數の見所であつたが、前原には大分亂暴もの部下があるので、其罷めらるゝに至るや、主として大隈の仕業であらうと吾輩ばかりが酷く恨まれ、前原幕下の猛者連が永い間吾輩を附け覗つてゐたので動もすると増殺されそうなることもあつた、と侯は其當時を追憶して自分に語られたのであるが、當時の事情は全くそれに違ひあるまい、自分と前原、前原と奥平、前原の叛旗を翻へした近因、さては大隈侯と自分、斯う考へて來ると何れも其間に脈絡があつて計らず獲た一書幅の前に自分の感想は潮と湧く。(此項完)

春城學人 憲法島

味を有つてゐる島である。

○島の名を夏島といふ、だが自分は是れを憲法島と言ひもし、又人にも言はせもしたと思ふ、何となれば前年此島に在つた小さな一邸宅は會て故伊藤公が屢々茲處に避暑したのみならず帝國憲法には最も深い因縁を有つたから、今は其邸宅の在つた所も砲臺となつてイカメしい場所に變じて居るが茲處が帝國憲法に殘さるべき場所だといふのは我憲法の立案が先づ此島の今話した邸内に於てせられたからである。

○斯ういふ土地は外國であつたなら頗る大切にして紀念の勝蹟とするのであるが、自分も此意味からカーターアイランド、即ち憲法島と命名し長く國民の記憶に印して置きたいと思ふ。

○伊藤公が此島にあつて憲法を立案した時の話を聞くと、最初は極めて其事を秘密にする必要上、其常僚たる、伊東巳代治、金子堅太郎、故井上毅の三子爵が前以て茲處に立籠つて起草した、其後幾たびも其草案は改められたことでもあらうが、兎に角之こそ帝國不朽の大典章が定まらるべき第一歩であつたので、即ち茲處で出來た第一案は夏島案とさへ名づけられた。

○金子子爵の直話であるが、何でも

其起草中に秘密が大切といふ所から毎晩寝る時には其草案の原稿を靴の中に入れて枕頭に置き、監視を厳重にしたつもりではあつたが、或る夜伊東子爵が目覺して見ると其靴が紛失して居る、サア大變、靴は一つでも中には國家の大憲章たるべき其土臺が納められてゐる、發見せずんばある可らずと百方搜索の末、在中の書類をつくり其儘で靴は近い品の中に轉がつてゐるを見出した、蓋し泥棒の仕業であらうが、ドロ公中を見て何やら書いたものばかりで一向金になりそうなものも無いので諦めて放り出した儘引上げて行つたものと見える。

○憲法の事に就ては今一つ話がある、早稲田大學で故小野君の追悼紀念會をやつた時、故人と親交のあつた金子堅太郎子爵が來られて興味ある一場の懷舊談をしたことがある、小野君が帝國憲法を作る上に非常な大功のあつたことは今更言ふ迄もない次第で君が心血を注いだ「國憲汎論」は其當時に在つて實に唯一無二の憲法に關する大著述であつて遍く内外の事例を引證し、該博の智見を以て特に日本に制定さるべき憲法の私案を誰よりも先に公にしたのが此著で、之に匹敵する著述は日本に絶

になかつたと言ふても決して溢美の言では無い。

○殊に著者の高邁な識見を以て日本に適切な憲法の立案を以てしてあるので、今話した所謂「夏島案」を作る時に此「國憲汎論」が實に杖とも柱とも頼む無上の参考書であつたといふ、不幸小野君は、憲法發布の盛事を見ずして此世を去つたが、其心力を傾けた君の案が大なる基礎とも勢力ともなつて即ち我憲法となつたのを思へば小野君地下の靈も定めて地下に喜んで居ること察せられると、金子子爵は頗る感慨に耐ぬ有様であつた。

○憲法島から不圖小野君の話に移つたが、これも金子子爵の話中に同君が國事を憂ひたことに就て傳ふべき事柄が残つて居るから題を改めてソレを少し御話しやう。



文の...
 古靴店
 〇五三

東京案内

徒弟古...
 大...
 〇五三

牛乳の動き入

〇五三

死の...
 金持
 〇五三

ミラの...
 〇五三

旭快天丸
 〇五三

想...
 〇五三

京、新...
 中、水...

料與職業

〇五三

中古靴
 〇五三

東京案内
 平 贊 尾 平

東京案内

牛乳の動き入
 〇五三

雪中の竹
 〇五三

衝口發

春城學人

◎身體に刺青を...
 支那には古くからある...
 傳の九紋龍史進...
 居る所から考へると、宋の頃...
 の習慣と思はれるが日本に於ては...
 何時頃から初まつたのか、何れ...
 表あたりの感化もあるらしいが...
 傳の影響は最も多かつたらしい...
 元來同書は日本にも非常の勢...
 以て流行したもので、十分に...
 の平民の意氣は、勇壯豪快な水...
 傳中の人物を喜ぶと共に之を真似...
 るとが市井の間に波及して、甚だ...
 しきは婦女子迄も之を真似て喜ん...
 だ位だから一時非常に翻譯の水...
 傳が流行すると共に刺青も亦益...
 流行したものらしい。
 ◎無論種々なるものを刺り附て、
 身体を飾るものは人間に強みを附け

衝口發

(七)

春城學人 薩摩政府の印

① 話が昔直に渉るやうであるが自分は先頃不圖一箇の銅印を得た、それに「薩摩政府」の四字が刻されてある所に興味を動いて、自分はいろ／＼と考へた、随つて調査もして見た結果、此一箇の銅印に面白い來歴のあることも分つた來た。

◎ 元來薩にして、「政府」の二字を用いたのが頗る訝しい、政府といへば政治を統一する中央政權の在る所に用ふべきで或一藩が斯く稱すべき筈が無い、維新の初め英語の「ガバメント」を政府と譯したのが何時の時代も新奇を求むる所から各藩動もすれば「藩」の代りに「政府」といふ字を用ひんとした傾向はあつたといふが而もその「藩」といふ字も支那から來たので薩府

かなかつた、たま／＼描いて貰へるとしても一切の構圖と費用とを彼の望むがままにして、其上堪え難き針先の苦痛を一月も二月もこらへねばならなかつた。

衝口發

(六)

春城學人

① 奇なる因縁

◎ 今話した岩下方平といふ奇抜な人物が佛國博覽會へ幕府に先だつて「薩摩政府」の刻印を捺した出品を附けて土地の産物を出品すべく、自ら携帶して佛國へ渡つた、處が後れ馳せに幕府からは向山黄村を使節として出品物を持たせて佛國に臨ませたのであつたが、行つて見ると自分よりも先に「薩摩政府」の名を以てした日本からの出品があつたには驚いた。

◎ 併し驚いたのは向山よりも却つて佛國政府の方で、どうも同じ日本國に「政府」が二つある理屈が分らぬ、之はどうも不思議だといふことから延いては薩摩と幕府とに大議論を生ずるやうなことになつたが、結局外國に居て同じ日本内部の争ひを滋くするのは國家の体面にも關する所からツイ其争ひは有耶無耶に終つたをうだ、自分の偶然得た銅印は即ち其出品箋に捺されて争ひの種となつた記念の印であつたのである。

青師にも亦同様の態度と心事とが必要であつた、是等の藝術家は人に針を刺し苦痛を訴ふるを見て寧ろ人知れぬ快感をすら覺えたといふ。

◎ 自分は曾て谷崎潤一郎の書いた「刺青」といふ小説を讀んだが其中に左の一節がある、江戸時代に於ける刺青師の名前などが出てゐるから參考の爲めに抜いて置かう。

清吉といふ若い刺青師の腕き、島町の奴平、こん／＼次郎などにも分らぬ名手であると持て囃されて、何十人の人の肌は彼の繪筆の下に地に地となつて擴げられた、刺青會で好評を博する刺青の多くは彼の手になつたものであつた、達磨金、ぼかし刺が得意と云つた、唐草權太は朱刺の名手と稱へられ、清吉は又奇警な構圖と灰鬱な筆の趣とで名を知られた、もと豊國、國貞の風を慕ふて浮世繪師の渡世をして居ただけに、刺青師に墮落してからの清吉にも、さすがに畫工らしい良心と銳感とが残つて居た、彼の心をひきつける程の皮膚と骨組とを持つ人でなければ彼の刺青を購ふ譯には行

が作つたものではない、諸侯が「藩」と言ひ馴らした爲め、幕府も自然之を認むるに至つたのであるが要するに「ハイカラ」な文字で之と同様に「政府」といふ字も新奇を競ふといふ點から「藩」の代りに内々用ひたこともあつたか知れないが、西洋の「ガバメント」は中央統治の意味であつて日本の如き諸藩が恣に取つて名づくべき文字で無い、殊に此印はどう考へても明治の初年か幕末のものらしいが、然るに麗々として其藩印にまで、「政府」と刻してあるのは妙だ。

◎ 斯う考へて自分は先づ不審の餘り薩摩の友人に調べて貰つた處が其返事によると維新の初め頃正に「政府」と刻した印を用ひたに相違無いとのこと、そこで然らば何處かに其印を捺したものがあるまいか、それを見たいと望むと明治二年に朝廷で發布した「告諭大意」といふものがあつて之は各藩に頒布したものであるが、其内の薩摩へ來た分に其印が捺してあるとて其書をわざ／＼贈つて呉れた、然るにそれを見ると正に「薩摩政府」の刻印はあるが、自分の得たものと其形状や字體が聊か異つてゐる、茲に於て自分は當時薩摩

ると云ふのが其主なる原因であらう、故に刺る圖柄にも武張つたものを選んだとは勿論で假令は武者繪を講ぐとか、或は赤手虎を搏つ所などを背から腹にかけ殆ど身体に餘地なきまでに刺つたものなんぞが今より三、四十年前には随分目に觸れたものであつた。

◎ 此の刺青は俠客などには是非なければならぬ一條件とも云ふべきもので、徳川氏の或る時代に於ては吉原へ通ふに刺青をした籠界の賃金は高かつたと傳へられる、夫は男子でも女子でも雪の如き膚に種々なる刺青をして誇りとした時代であつたからである。

◎ 今から考へると随分馬鹿氣たやうではあるが當時は刺青も一種の藝術となつてゐた、即ち之を刺るものは一種の藝術家氣質になつて成るべく材料を選んだものだ、材料とは何か、其刺青をさせる人の身体で、假令は有名な美人で、膚には黒子一つもない雪を吹くやうなのが、此藝術家の狙ひ求むる所なのであつた、丁度彫刻家が木や石を撰ぶと同様に……

◎ 且其針の使ひかたなども恰も外科醫の名人が冷然平然として病者に臨み大膽に其メスを揮ふ如く刺

が作つたものではない、諸侯が「藩」と言ひ馴らした爲め、幕府も自然之を認むるに至つたのであるが要するに「ハイカラ」な文字で之と同様に「政府」といふ字も新奇を競ふといふ點から「藩」の代りに内々用ひたこともあつたか知れないが、西洋の「ガバメント」は中央統治の意味であつて日本の如き諸藩が恣に取つて名づくべき文字で無い、殊に此印はどう考へても明治の初年か幕末のものらしいが、然るに麗々として其藩印にまで、「政府」と刻してあるのは妙だ。

◎ 斯う考へて自分は先づ不審の餘り薩摩の友人に調べて貰つた處が其返事によると維新の初め頃正に「政府」と刻した印を用ひたに相違無いとのこと、そこで然らば何處かに其印を捺したものがあるまいか、それを見たいと望むと明治二年に朝廷で發布した「告諭大意」といふものがあつて之は各藩に頒布したものであるが、其内の薩摩へ來た分に其印が捺してあるとて其書をわざ／＼贈つて呉れた、然るにそれを見ると正に「薩摩政府」の刻印はあるが、自分の得たものと其形状や字體が聊か異つてゐる、茲に於て自分は當時薩摩

◎岩下方半は久しく東京に住つたものだが此印を自分に贈つたもの話によれば印は今より三四十年前、新發田の原宏平翁が銀座の夜店で發見して手に入れたものだと云ふ。或は岩下家から拂物などの折に此の印も紛れ出たものかと思はれる。兎に角岩下の居た東京から出たものとすれば益々此印の來歴も明かになつた譯だが更に之に加ふるに故老が現在此印影を見て「たしかに之だ」といふ以上は一層以上の顛末に裏書したやうなもので、自分は其意味から今も此印を愛蔵してゐる。

◎併し全体薩摩が何故に「政府」と



間柄を書いたのを、松居松葉が翻案して太閤と淀君に當稱めたものに過ぎぬが、豪傑秀吉もヤハリ「人であつて神」では無い、即ち其半面には敵ふ可らざる凡夫の面目が、特に其物々しい豪傑の肩書を忘れて「私的秀吉」になつた時の面影に於て、著しく現れて來る。其天真流露の狀が、誠に「人間としての秀吉」を仕活かして我々に見せて呉れた。

◎其淀君にのろい所や、さりとして何處かに度量の大きい氣宇の濶い巨人の呼吸が極めて巧に演ぜられた、例へばヒステリックな淀君が太閤の和歌を罵倒して己れの才藻と門地と容色とを鼻に懸けるところ、それに對して太閤が巫山戯作らも遂に淀君を籠蓋し去るあたりは殊に兩人の面目鬚髯たる趣があつた。

◎淀君に扮した優人が若しも品位に於て當代匹なしと稱せらるゝ歌右衛門などであつたら一層よかつたことと思ふが、併し此の日の優人も何といふものか知らぬが兎に角相當にやつてゐた。

◎要するに「太閤」を演じた劇では明治以後之が第一と思ふが之は東儀の藝が巧い其上に彼が主として

◎圖らず手に入つた一箇の銅印に斯うした錯綜した歴史的事實が藏されてあるといふ所に、自分は少からぬ満足を感じて時々此印を取り出しては獨り會心の微笑を禁じ得ないのである。(此項完)

衝口發 (元)

春城學人

◎豊太閤の芝居
◎衝口發も大分續いた、そこで所謂「間」の規に芝居噓なども一寸變つてゐるかも知れない、尤も自分は餘り多く芝居も見ては居らないが、近來の新作中の一幕物ではあるが最も面白く感じたのが東儀鐵笛のやつた「豊太閤」を第一に推す脚本の筋其ものよりも其演じたか

「豪傑風」をよく解して其眞味を發揮した篇めかと思ふ、そこで自分は考へるのであるが、昔なら俳優が豪傑を演ぜんとした所で、其眞は所謂「河原乞食」の身の上、到底眞の豪傑に接するといふ機會を得ぬ、是に於て徒に誇張修飾、豪傑といふと恐ろしく人間離れのしたものに考へ、極めて不自然に之を演ずるといふことになる、然るに東儀は現代人たる幸福として始終大限疾に接觸して「英雄」の日常をよく心得てゐただけに、其態度動作を參酌し之を其技藝に用ひて茲に其眞を寫すことが出来たのだと、斯う思つて自分は窃に解決を得たやうな氣がした。

◎大人物に接するの効は、獨り優人のみではなからう、何事につけても人は常に大所高所に目を着けて居るべきであらう

衝口發 (三)

春城學人

情の土佐

(一) 容堂公の豪傑

◎先頃……と言つてもモウ餘程前の話になるが、久しぶりで三宅雪嶺博士を訪ねると、座に一客あり

がスツカリ自分の氣に入つて了つた譯で。

◎此芝居は自分がまだ見ぬうちに坪内博士が是非一つ見てやつて呉れと、己れの脚本が上演でもされたかの如くに……イヤ寧ろソレ以上は何度も頼むやうにして勸めるのであるが、行つて見ると成程坪内君の勸めたのも無理は無いと全く感心したやうな譯であつた、坪内君は古來「豊太閤」を演じたもので東儀ほどよくやつたものがなからうと褒めてゐたが、自分もソレには異存が無い。

◎舞臺面には之ぞといふ何の裝飾も道具も要らぬ唯だ金屏風あるのみで其場に現はれる人物も太閤と淀君の二人ばかり、場面も筋も至極簡單なものに過ぎず、舞臺でなくとも座敷でも何處でもやれそうに思はれ、時間も一時間くらゐで済むのであるが、どうも其見てゐる間の感興、見たあとの印象が甚だ深く、如何にも秀吉なる英雄の面目が活きて躍るやうな新しさを感した。

◎脚本は西洋の短篇ものを焼き直したので「ヤリダ」といふ作家がヘンリー八世とカザリン皇后との

土佐人だといふので談が不圖土佐の容堂公の事に及んだ、其事件の客の話を土佐藩で公の傳記を編纂中だといふことであつたが、之を聞いて自分は成程結構なことではあるが甚だ遺憾に思ふのは公の傳記が濶の手に依つて成るものとすると、必ず公の面目を傳ふべき最も大切な部分が抜けるに相違ないと語つて其容に自分の考へも述べ置いて次第であるが、所謂最も大切な部分とは公が其一面に於て極めて「風流の人」であつたといふ點が即ちそれである。

◎實際容堂公といへば古來公ほど文人趣味の道樂を遺憾なく發揮した人はなからう、勿論濶の財政も裕であつたが本人も亦詩、歌、書共に善くした(書は山陽に私淑してゐたが或はソレ以上の能書とも見られる)、而うして時に或は妓を聘し、大濶の君主としては頗る不似合のやうな豪遊もしたものであつた。

◎斯して彈正臺の眼が儼として光つてゐるにも拘らず柳橋藝者を滿載した船を墨江に泛べて盛んに豪興を遣つたものだ、而もそれが東坡が赤壁に遊んだと同じ日を擇ん

衝口發

(三)

春城學人
可情の土佐

◎自分と雪嶺博士との話は容堂公の事から花が咲いて、又別の所へ飛んだ、それは容堂公のみに限らず、元來土佐人中の傑出した連中は、多く公と同じやうに風流なものが多くといふことで、之は不言の裡に公の感化があつたのかも知れないが、兎に角何れも其趣味なり遣り口なりがよく似て居る。

◎先づ其好適例としては故後藤象次郎の如き即ち其一人で單に豪快なところが然るのみならず、其半面に艶ツぽい所を伴つてゐる所も亦頗る共通な點がある、イヤ寧ろ此方面は公以上であつたかも知れぬが、果して其兒の猛太郎といふ先生も親まさりの道樂家で遂に新潟あたりまでも馳名噴々の休であつた、其他故岩崎彌太郎男も爾うであつた。

◎故岩崎男といへば政府から船舶の事を任されて大富豪となつた人だが、其以前から既に大名的なことを好んで、吉原で遊ぶに際して

態々早駕を仕立てさせ幾千人といふ駕界を頼んで、途中、腰肩を換へさせ、堂々と繰込むなどといふ俗衆を驚かす底の豪奢を極めた。

◎されば富豪となつた後は一層此の大名ブりを發揮したことは勿論で、此人も亦容堂公以上に素晴らしい遊びかたを造つたと思はれる。

◎此他、田中光顯などいふ人も、アノ年になつて小林孝子などの孫見たやうな女の爲めに浮名を立てられるといふ騒ぎ、アレなどもヤハリ土佐風の血を引いてゐるので彼が邸宅の如きも頗る宏壯美麗を極め、あらゆる海内の珍品を蒐めてあつて其豪奢實に大華族を壓する程であると聞く、七十を超えて尙ほ斯んな慾望！特に女色に於て其番附の上位に居るといふやうなことも、一面から見れば其意氣壯者を凌ぐものであるとも言はれる。

◎斯う並べて來て見ると土佐方面の傑物には兎に角此豪奢の氣！特に性慾に關係のある點が頗る多いやうに思ふ、言ひ換へれば其豪奢の氣たるや「艶の豪奢」である、情の豪奢である。

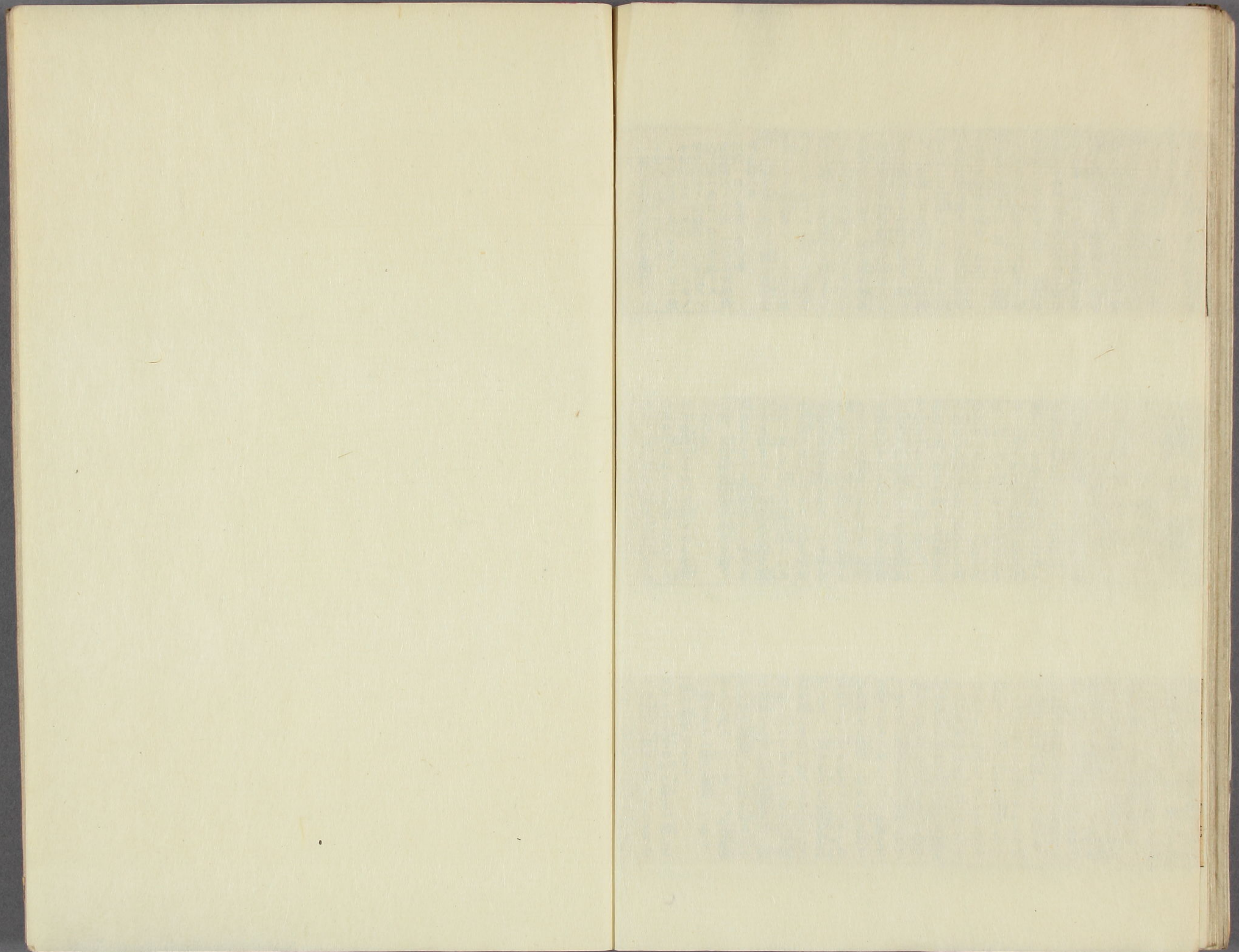
◎そこでは等の好色家を一括して一の情的人物傳を作つたらどうであらう、而うして「情の土佐」で

でやるなどは實に面白い風懐ではあるまいか。

◎そこで彈正臺へは此日に斯して遊ぶのは山内家の家例でござると豫め表向に届出でに及んで、借帝都を臆面もなく遊び廻り、或は得意の筆を揮つて之を白縮縮に染め抜かせ幾千人の妓に分つて揃ひの衣物として着せて見て、快然として笑ひ且つ飲むといふが如き奔放飄逸天馬行空の趣を示し想像するだに痛快を極めてゐる。

◎自分は即ち斯ういふ方面の容堂公を決して閉却してはならぬと思ふ、之を逸しては豪放なる公の氣宇なり趣味なりが傳はらず、隨つて後世完全に公の面目を知ることが出来なくならう、處で藩の舊臣の手に其傳記が編まれるとすると必ず其藩公を飽迄嚴正に作り上げやうとして斯ういふ捌けた方面を塗抹するに相違ない……と自分は深く此點を案じたので聊か苦言を其容に贈ると共に雪嶺博士にも其意見を問ふと、博士も興に入つた体で、例の「アノ拙い辯舌でボツボツと語り出したがいろく談笑中にフト又氣のついたことがある。◎そこで話を今少しく進めて見ることにする。

も題して政教社（日本及び日本人の發行所）から發刊したら面白からうと雪嶺博士に戯れたが、アノ變人先生も流石に此時はクス／＼笑ひ乍ら「可からう、遣らうか」と言つてゐたがマサカ之ばかりは出す筈もあるまいよ。



以下全て
白紙

